

さういふことになつた時には、もつと親切に考へてやらなければいけませんぜ！」

「え、難有う……」

餘りにKの話が眞剣で、且つ細かく入つて行くので、上さんも、始めの饒舌にも似ず、いくらか戸惑したやうな風で、「難有う御座います。それでは、お蕎麥は成るだけ早くさし上げるやうに致しますから」かう言つてそのまゝ下りに下りて行つた。

この會話は男の兒達には不思議に感じられたらしく、殊に兄の方の男の兒は、黙つて、しかも眞面目にそれを聞いてゐた。父親の言ふことは半分はわからなかつたけれども、半分はわからないこともないやうに見えた。「こゝのお上さん？ あの人は何？」などと兄の方の男の兒は訊いた。

Kにはその廢驛の旅舎の主人の Love Affair は、決して單なる物語ではなかつた。かれはその話の中にかれ自身を發見した。またさうした無數の戀の陷阱を發見した。HとS子の物語なども矢張それと同じものではなかつたであらうか。

男が中年にして妻以外のものを戀ひするといふこと、さういふ風に男が出来てゐるといふこと、男の止むを得ない要求であるといふこと、女の方の立場から言へばそれは非常に反對のあることであらうけれども、子供が女の所有物であるやうに見えることがその大きい原因を爲してゐること、續いて離れ難ない男女の體の羈絆、捨て難い歡樂の耽溺、身が減びるまでは、何うすることも出来ないやうな染着、さうしたことが生々としてその胸に迫つて來た。

Kはその主人と藝者との濃やかな愛情を歴々と眼の前に見ることが出来た。またその主人が自轉車に乗つて、そのさびしい七里の山道を女の方へ走らせて行くさまをも明かに想像することが出来た。或は數丈の風雪の中をも、止み難い熱い戀心を抱いて突破して行つたかも知れなかつた。またあたりに聳えた山巒をも、深く流れた溪流をも皆な女を思ふ心と一緒に眺めて歩いたに相違なかつた。そしてその戀心の巴渦の間を、一家の破滅や、自己の生活の凋落や、子供を思ふ心や、世間をかねた憂慮が雜つて縫つて通つたに相違なかつた。

そこには、K自身も亦通つて來た兩性の陷阱、あらゆる愛着、あらゆる惑溺があつたに相違ないのである。否、K自づからばかりではない、古來數千年のあらゆる男性の間に起つた戀ごころがそこにあつたに相違ないのである。

それは男性それ自からがわかつたために起つて來る悲劇か。それともまた女性も男性も共にわるいがために起つて來る悲劇か。それとも亦性の止み難い要求のために自然に起つて來る悲劇か。

Kはいつか自分のことの方にその心を集中し始めた。Kは溜息をつけた。かれ自身も矢張この廢驛の旅舎の主人と同じやうに、またはHとS子の運命と同じやうに、その陷阱の中に落ちて行くべき身であつたことを思つた。敗滅と破壊との會て一度すぐその眼の前にまで來たことを思つた。家庭や子供などを弊屣のごとく捨て、顧みないやうな熱い染着にもえたことを思つた。今でこそかうして子供達を伴れて旅などに出かけて歩くやうになつたけれども、會つてはかの女なしに片時もゐることは出来なかつた身ではなかつたか。かの女のためには身の滅亡をも顧みなかつた身ではな

かつたか。

かう思つたKには、その熱い戀ごころの境を、苦しい染着の境を、兎に角通過して去つて來た今の心の境遇を悲しいやうにもさびしいやうにも思はない譯には行かなかつた。また、如何にしてそれを通過し去つて來たかを翻つて考へて見ずにはゐられなかつた。何うしてかれはそこから出て來たか。浮び上つて來たか。曰く、それは眞面目であつたからである。染着よりも一層眞面目であつたからである。

Kはかれがかれの妻に對して親切であつたことを思つた。またかの女に對しても親切であつたことを思つた。續いて、かれの妻も、かの女も幸ひにして、勝敗の原理以上にかれに親切であつたことを思つた。單なる嫉妬單なる勝敗の原理に破壊されるには、かれ等の戀はあまりに複雑であつた。

Kは人間が戀に破滅するさまを悲しい心を抱いて眺めた。

「雨が降つて來た！」

かう兄の方の男の兒は言つた。

見ると、四面の山巒には靜かに灰色の雲がかゝつて、細い雨が長くそこから見えてゐる街道に降つて來てゐた。人々が番傘をさして歩いてゐた。

老婢が上つて來た。

Kはそれを捉えて、

「矢張、いろんなことがあつたんだつてね？」

「お上さんが話しましたか？」

「あゝ」

「何うも爲方がないですよ」

かう言つて老婢は半ばそこに坐りかけた。

「唯一つ、腑かに落ちないことがある」Kはかう言つて、「何も彼もすつかりよくわかつたけれども、唯一つ、その元の上さんの再縁したといふことがわからない……」

「さうですか」

「年だつて、そんなに若いんぢやないんだらう？ 四人も子供があつちや

——」
「今年、四十一……」

「それが、何うして子供を捨て、まで再縁さいえんする氣になつたかな」

「お上さん、話しませんでしたか？」

「別に……」

老婢は笑つた。

「何かわけがあるんだらう？」

「わけつて別にないけれども……」

猶ほ話して好いか、わるいかわからないといふやうにして言淀いひよどんでゐるのを、Kは追ひつめるやうに、

「再縁した家は何ういふ家だえ？」

「……」

「矢張、農家かえ！」

「いゝえ」

「話してきかせ給へ」

「今はもう、よしてゐるけれども、その再縁した亭主は、つい、此間まで村で巡査をしてゐたんですよ」

「は、ア」

と始めてKは飲み込めたやうにして、『ふん、わかつた、わかつた……。その巡査と上さんと出来てゐたんだね！』

「……………」

黙つて老婢は笑つてゐるので、

「さうだ、さうだ、それに違ひない。さうでなくつて、子供を離すわけはない、この主人だつて、さう無茶なことをするわけはない……。さうだ、さうだ。亭主が道樂をするんで、そんなら、自分だつて男を拵へてやるつていふ風に上さんはなつて行つたんだ……。それに違ひない。その巡査ッ

ていふのはまだ若いんだらう？」

「よくわかるねえ、旦那には？」

かう言つて老婢は笑つた。

「それぢや爲方がない。両方で、二人して滅茶々々にしてつたやうなものだ……。それぢや、此處の主人が村上に行つてつたのも舞理はない。」

勝敗の原理だけで單純に事を運んで行く世間の人達のことを、歴々と新しい證券を持つてKの頭に印象されて行つた。

「だから、駄目なんだ……………」

「でも、此處の旦那も、よく長いこと家を明けてたでな」

「ぢや、まア、始終、その留守には、その若い巡査が入り込んで来てたわけだね。いくつだつてその巡査は？」

『三十五六——』

『今でも、一緒に暮らしてゐるのかね？』

『この村にはるねえがな……。何でも、海岸の方にはるさうだ……。ちつとは上さんも金を持つてたで。』

『そのある中は、まア、無事に納つて行くが、それがなくなると、捨てるッていふわけだね』

『だから、親類もやかましく言つたんですけども……』

『それぢや滅茶滅茶だ……』

Kはかう言つて笑つて、『ぢや、上さんも、好い事をしてゐるわけだから恨みつこがなくて好いやね』

『何うも色戀ばかりはなア』

老婢はこんなことを言つて、そのまゝ下に下りて行つた。

Kには會て榮えて衰へた廢驛の大きな舊家の滅びて行く空気をまざまざと嗅ぐやうな氣がした。入つて來たところにある大きな圍爐裏、さつきちよつと下りて行つた薄暗い汚ない厠、それにつゞいてゐる佻しい風呂場、さうしたものにもその巡査と元の上さんとの戀の汚ない空氣が漂つてゐるやうなのをKは感じた。降り頻る雪の中に、主人の留守を幸ひに、その二人がいちやついて戯れてゐるさまもそれを歴々と眼に映つて見えた。

(さうなるか、でなければ自分のやうに離れて來るか。それより他に、この2と3の問題は解決されやうがないんだ……) かう腹の中に思つたKは思はず深い深い溜息を吐いた。

静かに四面の山は暮れて行つた。雨は猶ほ盛に降つてゐる。灰色の雲は次第に渦きあがつて、今は雲切れすらもなくなつて了つてゐた。

『明日は降りかも知れないな』

かうKが言ふと、

『うむ』

兄の方の男の兒は、さびしさうに暮れて行く空を眺めた。

隣の家の白堊も、小さな池も、その岸に咲いてゐる赤い白い鳳仙花も、
庇の下で餌をさすつてゐる鶏の群も、何も彼もすべて夕闇の中に包まれて
行つた。

八月ではあるけれども、山の夜風は寒いので、外してあつた障子を閉めて、
ほんやり薄暗くつゝいたランプの周圍で、かれ等は静かに旅をして來

た山や川の話をした。

やがて上さんは、注文した打ちたての蕎麥を運んで來た。
蕎麥は旨かつた。

『父さんの言ふ通りだらう。焼畠で取れた蕎麥は旨いだらう？』
『うむ』

『日光のと何方が旨い？』

『何方とも言へないな』

かれ等も三杯も四杯もお代りをして食つた。腹が減つてゐるので、殊に旨かつた。

あとで茶を飲みながら、Kは上さんに、

『まア、一生懸命に眞面目に稼業に精を出すんですね』

「それが何よりで御座います」
 「本當に、かうした舊家を亡ほして了ふのは惜しい……。それに、好い處だからな。」

「それを皆さんが言つて下さるのです。北中の小田屋が潰れては、泊るところがなくつて不便でしょうがないつて仰有つて下さるんです。何しろこの峠の中では、何方から來ても、此處が真中なんですから……。蒲荷でも一軒昔けんせかしからの家がやつてをりますけれども、あそこは何かにつけて不便で、北中とはわけが違ひますから……」

「夫婦一緒に、睦むつしく稼業をするのが一番何よりだからね。元の主人のやうに、二人で勝手な真似をして家を潰したり、子供に泣きを見せたりしてはつまらないからね」

「本當で御座いますよ」

「まア、お互ひに親切にするんだね……。萬一さういふことでも起つた時には、亭主のことをも親切に考へてやるに限るよ。男だつて、さう無茶ぢやないんだからね。またさうして道樂をしたつて、面白いばかりで、やつてるわけではないんだから……。矢張、辛つらいさびしいことがあるから、さういふことが起るんだから」

「さやうですとも……」

かう言ひながら上さんは男の兒達に、「坊ちゃん、もう少しか……。よろしくば、まだ澤山あるんですから」

「何うだ、もう一杯……。こんな旨ひ蕎麥は滅多めったに食へないぜ！」
 「もう、一杯だ！」

弟の方の男の兒は、かう言つて腹を叩いて見せた。
その夜は雨の音をきながら、緩くり靜かにかれ等は眠つた。

あくる朝は、雨を衝いてかれ等は出かけた。

路はさう峻しくなかつたけれども、成ほど大きな峠だと思はれるやうな谷が次第にかれ等の前にひらけた。山と山と重り合つて、遙かに下では溪流の咽ぶ聲が微かにきこえた。處々に茅葺の人家などがあつた。

村上の女の許に通ふものではないか、をりをり外套を着た旦那衆らしい人が自轉車を輾らせてそしてかれ等を追ひ越して行つた。

明神岩は想像したとは違つて、谷のぐつと奥に押し詰められたやうなところにあつた。小さな社の前に立つたKには、天明年間に、雪を侵して此

前を通つて行つた『東遊記』の記者がなつかしく思ひ出されて來た。雪のなだれの上から落ちるのを怖れながら、生きた空もなく通つて行つた昔の人達がそのまゝそこにゐるやうにかれには思はれた。

越後と羽前の國境を成してゐる峠を越して、それから猶ほ大きな谷を一つ繞つた山陰のやうなところに、そのさびしい蒲萄の驛はあつた。山國風の底の長い錯落とした人家、一軒しかなくつたいふそのさびしい古い昔からの旅舎、その家々の間から見える野菜の栽えてある畠、ある家では、ちよつとその店を借りて、かれ等は降り頻る雨を避けて、拙い田舎菓子などを食つた。

『S町まで此處から、二里半、もう一息だな。S町に行けば、馬車があるかも知れないから……』

かうKは男の見達に言つた。

S町から村上まで行きさへすれば、もう其處には汽車がある。十日近く山やら野やらを歩いて來た旅行も、もうこれでお終ひになるのであつた。やがてかれ等は出かけた。

もうそこからは、別に心を惹くやうな山巒の眺めもなければ、大きな谷の溪流の潺湲もなかつた。路はひた下りにS町へと向つて下りて行つた。しかし、Kにはかの女のことか頻りに思はれた。村上のその藝者とかの女とが一緒になつて見えたり、押詰めに押詰めて行つた争ひの上にさうした空氣がほつかり浮んで來たことが考へられたり、今まで眞面目だと思つたことが單に染着で、實は眞面目はさうした熱した心の中にはゐないといふことが思はれたりした。これまで通つて來た兩性の凄しい争ひの火花の

中の光景なども振返つて繰返された。

(さうだ。今夜、瀬波に着いたら繪葉書でもやらう)

こんなことを考へながら、Kは男の兒に竝んで歩いた。

B峠はやがて盡きて、今度はひろびろとした野があらはれ出して來た。それに、一時盛んに降り頻つた雨も小降りになり、それから霽れて、國境近くの高い山々から雲のわかれ行くさまが晴れ晴れと眺められた。峠の中から流れ落ちた水は、平らに緩かに淀んで流れた。

眞直な眞直な、一里も二里も一目に見通されるやうな路はやがて來た。そしてその長い平坦な路に飽んだ頃には、人家の疎らな、その間に樹木や野菜畠の雜つてゐるやうなS町があらはれた。

「ヤ、來てらア、馬車が——」

かう兄の方の男の兒が言つた。

見ると果してそこに、草色のベンキの剥けた四角な馬車が一臺さびしうにそこに置かれてあるのをKは目にした。

『村上から来たんだ。好い鹽梅だつたね』

かう言つて、Kはその馬車屋の男達の休んでゐる茶屋へと入つて行つて、そこで午飯の準備をさせた。

一時間ほどしてやがて出發したその馬車は、村落の錯落した、または樺の竝樹の連つた、石の多い間をがたがたと動いて、次第に山の奥から流れ出して來てゐるS川の大きな流域へと近寄つて行つた。高い山巒が過ぎ上る雲の間から一つ一つあらはれて來る向うに、布を敷いたやうに白くS川の見え出して來た時には、「これがS川だよ。こゝでは鮭が澤山獲れるんだ

よ』などとKは男の兒達に指示した。

村上の古い狭い町の通でかれ等はその乗つて來た馬車を捨てた。その時Kの頭にはそこにある狭斜街のことがちよつと浮んだが、その所在をも知らずに、またさがしもせず、そのまゝ瀬波の温泉場の方へと志した。やがて町を離れると、停車場の向うの松山の上に、そのめづらしい噴泉の煙の高く昇つてゐるのが一目に美しく見渡された。

その温泉場でKが書いた數葉の繪葉書の中には、かの女に宛てたものも一枚雜つて入つてゐた。それにも男の兒達は署名した。

北國の雪を見に

一

北陸の雪は、米原から入つて行つた感じが先づ旅客の心を惹く。「これから寒い雪の中に入つて行くんだからな」こんなことを乗客が言つてゐるのを耳にしたが、實際、誰でもさうした氣がするに違ひない。琵琶湖の北岸を繞つた山巒には既に雪が白く、賤ヶ岳の古戦場のあるあたりには、巖が深く細かく入り込んで、そして斑らに白くなつてゐる。余吾湖の凍つた形も面白い。殊に汽車のレールに添つた北國街道——勝家が鰻縦隊となつて

此方へ出て來た街道が、行くまゝに次第に雪が深く、始めは半は泥濘半は堆雪であつたものが段々人跡も認められないほどに深く埋められて了つて山に凭つて、村落がさびしさうに點綴されてあるさまは、繪でも見るやうに感じられた。

一度通り越してまた戻つて入つて行くやうな刀根の小さな山の中の停車場、これから汽車はトンネルの中に入つて行つて、例の椽木の一支脈を穿つて、次第に敦賀平野へと出て行くのであるが、このあたりはかなりに雪が深く、陸軍の騎兵隊がこれを越したさまや、新田義貞の軍が湖西からこの峠を北國へ入つて來たさまなどが脈々として私の胸を往來した。

敦賀に入ると、感じは全く一變した。ここでは地上に雪を見ることは出來なかつたが、四面の山巒は全く白堊を塗つたやうに白く、そこから吹き

おろして来る風は刺すやうに冷めたかつた。夏ではそれとはつきりわからないであらうが、敦賀灣頭に聳えてゐる榮螺ヶ岳が、雪を被つてさながら榮螺を伏せたやうになつて見えるのは面白かつた。停車場から寒風に吹かれて入つて行くやうな長い路、大きな老松の徒らに風に鳴つてゐる氣比神宮、それから町に入ると、庇の斜めに出た家屋は一列に連つて、外形はさびしく寒いけれども、内は暖かである北國の人達の火燵の生活が私には想像された。火燵板の上の盃盤、それを取巻いた美しい妓達、さうした興も、決してわるくはなかつた。殊に羨しいのは生魚が多く、到るところに、小鯛の赤い澄刺としたのがあり、長い足をした大きな蟹があり、烏賊の生づくりがあり、更らに見て行くと、いかなる家の軒にも、むしかれびを串につらねてさして日に干してゐないものはないことであつた。北國の冬の酒

の旨さなどを思ひながら私は歩いた。

金崎宮の上から眺めた敦賀の港は、明るい美しい繪のやうな感じを私に與へた。十年前に來た時とは、ウラジホストックへの航路の關門となつたため、大分、町の様子なども變つたところもあつたけれども、理髪店や小問屋の看板をロシア語で書いてあるのなどもめづらしいやうな氣がしたが、港はさう大して開けたといふ感じも私には起らなかつた。それも冬で、碇泊してゐる汽船の數も少なかつたためであらう。白い赤いペンキ塗の汽船に、日が斜に明るく照つて、碧い海に鷗の二三飛んでゐるのも靜かに、南朝の悲劇が會て此處に演ぜられたと思ふにすら、餘り縁遠いやうな氣が私にはした。

祠の後苑からすつと私は裏に廻つて、港から外洋に通ずる海の蘆葦とし

たさまを長い間立つて眺めた。斜に欹つた一帆の白いのもさびしかった。

二

杉津の數多いトンネルの中は、この沿線でも殊にすぐれた眺めを持つてゐるが、これを越後の鯨波附近のシインに比べて見るのも興味の多いことだと私は思つた。何方かと言へば、私は後者よりも前者を取るが、しかも鯨波の冬の怒濤の掀翻は、また此處には求めることは出来なかつた。此處は何方かと言へば柔らかな、靜かな、または微かな氣分である。それは海のやゝ遠いのもその原因を成してゐるが、トンネルの位置の高いのもさうした感じを旅客に誘ふ材料となつてゐるが、要するに、此處から見た海は、明るくつてそして晴れやかであつた。トンネルを通過する毎に、次第に視

界が狭くなつてゆく形も何となく夢の中に見る海の眺めが何かのやうな氣がした。

今庄に行くと、雪は深くなつて來た。地上己に數寸の雪がある。さびしい田園の布置、處々に點綴せられた杜、をりをりは碧く流れた瀬などが汽車のレールに添つて流れた。北陸線では此處等あたりが一番雪が深く、をりをり汽車も雪に埋められるといふことであるが、成ほどさうかと思はれる地勢である。これから次第に、汽車は山の中を通つて、瓜生保の孤忠の址を示した杣山の古城址を指點し、更に進んで、福井平野へと次第に出て行つた。

福井の一つ手前の大土岡の停車場あたりから、北東に連る山巒の裝の細かい雪を指して、私は一緒に伴れて來た子供達に

『朝倉義景の一乗谷の城址はあの山の中にあつたんだよ』
かう言つて聞かせた。

福井は下りる時間がなくて素通りをした。日暮近く、九頭龍川の鐵橋を
わたりながら、新田義貞の戦死した燈明寺とうみやうじをそこか彼處かと指し合ふの
も旅の興であつた。日暮れて金津に下車し、それから三國線の軌道に乗替
へたが、その列車はスチムもなく、上に吊したランプも暗く、いかにも
田舎の場末に來たやうな氣がした。

蘆原あわらの温泉町は、しかし私に一種特色ある感じを持たせるに十分であつ
た。温泉宿の軒を並べた細い通、軒毎につゞいてゐる薄ほんやりした旅舎
の軒燈、をりをり何處からともなくきこえて來る爪弾つまひきの三味線の音もなつ
かしければ、空にある半弦の月が、おほろにあたりを照してゐるのも、何

んだか春のやうな氣を私に起させた。たづねて行つた温泉旅舎は、すつと
町外れの、一番隅にあるさゝやかな家だつたが、しかし、室は大きく取扱
も親切で、花崗岩の湯殿の湯が溢れ漲つてゐるのが、限りなく私達を喜ば
せた。

朝起きて見ると、前の庭には、石の燈籠や鶴などが置いてあつて、ひよ
ろ松が二三疎らに點綴されてあるのも雅致がうちに富んでゐると私は見た。

村の四辻には、水道の槽ふねがあつて、娘達は皆々赤い褌たすきなどをして、手桶
を持つて、其處に朝の水を汲みに來てゐた。

この温泉が、矢張越後の村上附近にある瀬波温泉せなみせんと同じやうに、明治十
七年に始めて發見されたといふことは面白いと私は思つた。元はこの附近
は、瀉湖かたこの多い卑濕地ひしつちで、一面の蘆荻であつたのが温泉の發見されたため

に、一朝にして、かうした繁華な町を成し、今では昔からある山中、山代あたりとその名を齊うするに至つたのであつた。

私達は靜かに一夜をそこに過した。

三

衰へた和船の港は到るところにある。酒田もさうである。下田もさうである。能代もさうである。新潟も矢張その一つたるを免れない。私はまたそこに三國の一港を見出した。

大きな倉庫の連続、がらんとしたさびしい町、それを通り抜けると、九頭龍川の大きな河が徒に白く流れて、河口に集る帆船の影も稀に、寒い北風が松の鳴る丘の上の小さな祠を吹いた。名物の子持蟹を器に入れて、あ

やしけなスラングで漁師の鼻の觸れて歩くのもさびしければ、綿フランの汚れた襟巻をして低頭勝に歩いてゐる漁師の顔も寒さうであつた。私達はそこにある北海の一奇勝東尋坊を探るために、その古い港町を横ぎつてそして段々河口から海岸の方へと出て行つた。

大河の海に注ぐさまは、いつ見ても面白かつた。信濃川の河口、利根川の河口、それほどの雄大な眺めを私は其處に得ることは出来なかつたけれども、それでも、怒濤の掀翻、山巒の搖曳、青松の排列を見ることが出来た。潤い潤い海は私達の前にひらけた。

海よ、海よ、暗澹とした北の海よ、かう私は心に叫んだ。

雄島の方に通ずる街道から東尋坊の奇岩のある岬頭の方にわかれて行く路は、大抵は松の中で、ところどころに磯清水が湧き出しているたり、海岸

特有の緑の細かい背の低い木藪が繁つてゐたり、立竝ぶ松の間から濶い海がをりをり見えたりしたが、松の中を出て、丘にかゝると、眺望は俄かに一變して、三面全く海を見るといふやうな地形に次第になつて行つた。「かういふところは好いな」こんなことを言ひながら私達は歩いた。

次第にその東尋坊の奇岩はあらはれ出して來た。

私は私の見た中ではかなりにすぐれた奇岩を見ることが出來たと思つた。芥屋の大門、七ツ釜、又は男鹿半島の萬雀の窟（わんせつのかほ） あれほどの奇は持つてゐないけれども、それでもこれほどの奇岩をその他の何處に發見することを得るだらうかと思つた。東海にはとてもこれだけのものはなかつた。

惜しいことには、奇岩の奇だけで、海はさう大して心を惹かなかつた。

これで、陸上からは行けずに、舟を熾（さ）して始めて行つて見ることが出來る

やうな位置にあつたならば、一層その價值を高くしたであらうに——。あまりにあらはになりすぎた。餘りに人寰（じんけん）に近すぎた。せめて若狭の大門小門位の位置にあつたらばと私は思つた。

さつき來る途中、ある家に、東尋坊遊覽船出船所と書いてあるのを見た。成ほど舟でやつて來て見たら、もつと見事であらうなどとつづいて私は思つた。

私達は俯（か）す様にして、岩から岩へと歩いて眺めた。深く穿たれた岩石の巖（いわ）、削立千尺とも言ふべき大きな柱狀をした巨岩、怒濤の打寄せて來る巨洞（どう）、すべて子供達の胸を驚かすには足りた。

三國に戻つて、そこで蟹を肴に酒を飲み午飯を食つた。子持蟹の旨かつたことよ。

ウマラナクネ

四

「あれは白山ですな」

さつきからそれと目をつけた真白な高い山を指して私は乗客の一人に訊いた。

「Yes」

かう言つて、其乗客はわざわざ立つて来て窓から覗いたが、自分の位置から考へて判断したやうにして、

「さうです、さうです。白山です」

かう早口に言つた。

私は愉快であつた。私はこれまで三度此處を通るが、これほどはつきり

白山の姿を見たことはなかつた。最初に來た時には片山津から實盛の墓を海岸の松原の中にとつね、それから柴山瀉の一端を掠めて、三湖臺の方へ出て來ようとする時に、纔かにその雄大な山の髻だけを見ることが出來たが、しかも忽ちにして雲の漲りかくすところとなつて了つた。この山は例として滅多に見えない山である。北陸線を汽車で通つた位では、滅多に見えない山である。いつも雲煙の中に深く藏されてゐる。それが冬なればこそ、かうまではつきりと見ることが出來たのである。何等の好運ぞや。私はちつとそれに見入つた。

加賀平野の地上にはまだ雪はなかつた。しかも平野から一步山麓の中に入れば、既に深い深い雪であるらしく、その前衛を成した屏風のやうな壁の細かく刻み込まれた山は斑らに白く、それから次第に、白雲を塗つたや

うに白く白くなつて聳えてゐるさまは、私の目を刮しめずには置かなかつた。その群山を帥ゐて大空に聳えてゐる形は、私に羽後の烏海山を思はせた。大きい方の男の兒は、私からそれを聞くと、手帳を出して、頻りにそのスケッチをやり始めた。

動橋驛あたりまで、その雄大な山の姿は見えてゐた。

山中、山代、粟津、それから片山津、この四つの温泉は、北陸では最も人口に膾炙してゐる温泉場である。山の温泉としての山中、平野の温泉としての山代、丘陵の中の温泉としての粟津、湖水の温泉としての片山津、すべて皆特色がある。山中の蟋蟀橋の持った溪流はさう大してすぐれてはゐないが、山水の少い北陸では、先づ以て珍としなければならぬ。片山津にある柴山瀉は、山陰の東郷池と相拮抗するに足りる。粟津の近くには、

例の谷汲と那智とを二つ合はせた勝地として知られてゐる那谷寺がある。紅葉の時などには殊に捨て難い。殊に、近頃では、此四つの温泉を連絡させて運轉する温泉軌道なるものが出来て悠遊兩三日の興を貪るには持つて來いである。私は山中に是非一夜泊つて行きたいと思つた。しかし旅の行程はそれを許さなかつた。山中に泊れば、能登まで入つて行くことが出来なかつた。止むなくこの間は素通りをすることにした。

小松近く、三湖が見え出して來た時には、午後三時すぎの夕日が斜にさし透つて、一番小さい木場瀉が燦爛と金屬のやうに輝きわたるのを目にした。三湖臺を私は指點して通つた。

金澤での二時間は、子供達だけを車に乗せて見物に出してやつて、私は一等待合室の卓の上に原稿紙をひろけて、大分おくれた新聞小説の一回を

書いた。兼六公園などは私にはめづらしくなかつた。

五時すぎの汽車で、津幡から七尾へ行く汽車に私達は乗った。

五

津幡で日が暮れて了つた。それから私達は何も見ることが出来なかつた。その間には河北潟の水光があり、敷浪附近の繪のやうな松原があり、邑智潟があり、見るところ、また子供達に見せたいところが澤山に澤山にあるのであるけれども、私は何うすることも出来なかつた。私は却つて車窓内の人々に眼を向けた。熱心に何かを誦してゐる御嶽行者の様な男や、猫を大きな袋に入れて乗つて来た細君や、北海道から故郷に十二三年振で歸つて来たといふ夫婦づれや、さうした人達も、七尾に汽車が行き着くまでに

は、一人一人さびしい薄暗いランプのついた小さな停車場を覗くやうにして下りて行つて了つた。

灯が一つ二つ水の上に浮ぶやうに見えてゐるので、それが邑智潟であるといふことが僅かに知れた。

しかし、此間のさびしい気分は、闇のために、一層深く私の心に染み通つたやうな心持がした。前に来て知つてゐるためであらうが、松風のさびしい中を汽車がひとり通つて行くのを私は感じた。さびしいさびしい気がした。

九時近く私達は七尾に来て、そこで辛うじて一臺しか来てゐない自動車に競争して乗つた。矢張、何も彼も見えなかつた。晝ならば、七尾港まで行つて、あの眺望の好い七尾灣を子供等に見せてやる事が出来るのに……

……。またそこまで行かぬにしても町の様などを見る事が出来たのに……。こんなことを思つてゐる中にも、自動車は走つて、しかもその自動車は先約の客を迎へ乗せるために、そんなところには行かないでも好い遊廊の中などを通つて、そこに暫しの間止つて、妓達せんたちに送られる酒臭い客を二人まで乗せた。

『お蔭で七尾の遊廊を見せられたわけですね』

などと、初めから一緒に乗つた相客は私に云つた。明るい灯、ぞめいて通る客の群、軒近くか、けてある四角の行燈、賑かな湧くやうにきこえる三味線や鼓の音——やがて自動車は走り出して、さうした光景が夢か幻のやうに消えて、あとは何もなく真闇まっくらな暗になつて了つた。

暫くして私達は私達を大きな旅館の三階の一間に見出した。昨夜とは違

つて賑やかな、慌たしい、または卑猥ひやうな歌などを隣の客が唄ふ一夜を見出した。

あくる朝は、北國にも似合はない暖かい雨で、旅舎の樓上から見た七尾灣の海は、小さな湖水が何ぞのやうであつた。海は茫と春のやうに霞んで、能登島の髻はうまつさへも得ることが出来なかつた。やがてまた自動車の幌の中に包まれて、何も見ずに七尾の停車場に來た。

このやうに、七尾も、和倉も慌たしくすぎて來たけれども、昨夜、闇に通つて來た津幡間の朝の眺めの美しさは、私達の目を刮せしむるに足りた。何といふ松の美しさであつたらう。何といふ緑の色の鮮やかであつたらう。また何といふ緒い土と青い松との配合の見事さであつたらう。私は此他に何處にかうした美しい松の林を發見することが出来るであらう

か。

六

倶利伽羅を越して、富山平野に來ると、流石に雪は深かつた。富山の市街は全く五六寸の雪に包まれ、日本アルプスの山の高さ、また氣象の峻しさを思はせるやうな凄じい風雪の渦き上るのを私達は目にした。ことに富山以東の海岸の漁師達が、濱で獲つた生魚を富山まで今朝運んで來て、そして、財布に一杯に金を満して元氣好く汽車に乗つて歸つて行くさまは、私の目を惹くに十分であつた。滑川あたりに行くと、暗澹とした海が靜かに展けた。

魚津の町はちよつと下りて見たいやうなところであつた。蜃氣樓できこ

えた町、それ以上に漁市らしい特色を持つた町の家屋のさまが私の心を惹いた。汽車の進むにつれて、氣象は次第に峻しく荒くなつて行つた。それも理である。此あたりは、日本アルプスの峻嶺の末梢で、黒部の四十八瀬はこの海岸平野を浸し、治水の幼稚であつた時代には、出水のために、旅客は往々そこに滞留數日に及ばなければならぬやうなところであつたから……。

入膳を経て、泊町に至る、海に落ちた山巒の姿は既に前に近く、親不知の峻を有した徒崖は、風雪に半ば埋れながら、微かにその髣髴を示して來た。そこにある小川温泉は、遠く樋で引いて來るために、火力を加へなければ浴することが出來ないさうであるけれども、それでも一夜そこに泊つて行つたら、多少の遊興があつたであらう。

市振から親不知の嶮にかゝる。しかし汽車はその上を行くので、をりをり北海の怒濤を目にすることを得るばかり、仔細にそのシインを見る事が出来なかつた。

日暮に近く、直江津に來たが、そこから一步入れば一步だけ雪が深く、高田あたりに來ると、流石は名所と言はれてゐるだけに、今年は少ないと言ふにも拘はらず、雪は既に半ばその庇を埋めようとしてゐた。

私達はこれから關山を経て、田口にある赤倉の分湯に一夜を過さうとしてゐた。靜かな雪の山の中の浴槽、僅かな隙間からでも雪の吹入られて來るやうな旅舎の間、そこで今夜は靜かに雪の北國の趣味を味はうと思ひながら、遅い汽車の一刻も早くその田口の驛に到着せんことを望んだ。

無名の溪山を探る

K君――

今度の旅行は思ひ切つて、昔のやうな徒歩旅行をやつて見るつもりで、例の男の兒を二人伴れて出かけて來ました。汽車は無論三等です。三等の汽車の中で、何うかして寢やうと思ふほど辛いことはありませんね。あの一つの腰掛をたまさかにすべて専用することが出来ても、それでも僕のやうな背の高いものは横になることは出来ません。そのため終夜轉輒反側の苦しい行をやりました。終には爲方がないので、座禪のやうに脚を組んでじつと精神を凝らして見ました。これは比較的その苦を忘れるのに效があ、

りました。

何うも日本の汽車は不親切だと思ひました。もつと旅客のことを考へたなら、客車の構造などにも、もう少し好い便利な構造が出来ると思ひます。それに、食堂などで拵へて持つて来る食物も拙い。東北線は下國の故かも知れませんが、下國生れの小生は、殊にそれを残念だと思ひました。

今度の旅行は、主として山水のなくれた勝をさぐるつもりで出かけて来ました。土地の邊陲にあるため、または交通の不便なため、すぐれた山水が不遇であるのは、日本にもかなり多くあるだらうと思ひます。これを少し探つて見たいと思ふのが、私の多年の希望の一つでしたが、忙しき世の中にあるてはそれが容易に出来ない。徒らに地圖を見てあくがれてばかりゐる。それを今度は少しづつ、實行して見るつもりなのです。

陸中の貌鼻溪を一番先に目當てにしました。それは、かねていろいろな人から聞いてもゐるし、曾て其處に行つた弟からも繪葉書を貰つてその山水の彷彿をいくらか知つてゐるし、岩手縣の知事をした堤勝太郎氏からも來遊を勧められたこともあつたからです。しかし、そこに行く間の路は、いかにもひどい路でした。車なし、馬車なし、乗物をもとめれば荷馬車に乗せて貰つて行くより他爲方がないといふ處です。で、五里に近い山路を暑い暑い日に照されながら、流汗淋漓といふ形で歩きました。

K君、君などには、ちよつと、この山地のさまは想像が出来にくいです。羊腸たる九十曲折、丁度大腸の曲折に似た山路で、その癖山はさう高くなく、溪もさう美しくなく、飲む水も皆ぬるい。そしてそこに住んでゐる民は、日本でも一番文化の程度の低い程度なのです。こゝらの生活など

を見ては、關東平野の百姓などは、まだ殿様だといふ氣がするやうなところ
 です。しかし、そのため原始的な氣分は十分に味ふことが出来ました。川
 といふ川はすべて鮎がゐる、鮎の石焼などといふめづらしいものを食ひま
 した。こんな小さな川にと言ふやうなところにも鮎が澤山ゐるのでした。
 昨夜泊つた長阪の驛、またその驛舎、これなどにも非常にロオカルなと
 ころがありました。この街道は今泉街道と言つて、東北線の駛走する北上
 平野から、その東に連つた廣大な山地を三四十里も通つてそして纔かに三
 陸の海岸に出て行くのですが、そこでは今でも二十年前と同じやうな旅の
 扮装をした卷莫産と笠の旅客を多く見ることが出来ました。またこの山の
 中に乾魚やら鹽やら砂糖やら醬油やらを運んで行く荷馬車の行列を見るこ
 とが出来ました。旅客は皆なさうした山の中を四泊五泊してそして海岸の

方へ行くのでした。従つて、君はその山中の驛またはその驛舎のさまを想
 像することが出来るでせう。夜は蟲が澤山飛んで來るので、ランプは皆な
 外へ吊るして置いて、そして暗い中で人々は話したり物を食つたりしてゐ
 るのです。日が暮れると、驛のところどころに火を燃やしますが、それが
 暗い電氣も何もない町のさまを不思議の世界のやうにして見せます。その
 火を燃やす形が餘り仰山なので、これはてつきり七夕の祭のためだと私は
 思ひましたが、(丁度七夕で、町は例の五色の紙をつけた笹で埋つてしまし
 た)段々きくと、さうではなく、蟲を火の下に集めるために、毎晩かうし
 て火を焼くのださうです。暗い山の中の町に、二三ヶ所にほつとそこだけ
 明るく燃えあがる火を見てゐると、何だか不思議な世界にでも、またはロ
 マンチックなお伽話のシインの中にでもゐるやうにも私には思はれまし

た。一しきりその火が燃えて、それがきえると、あとは再びぐらい闇の中
の町になつて了うのです。そして星の光、微かに周囲の山巒の微かな淡い
線を見せるばかりです。私は男の兒達と橋の上まで行つて、そして靜かな
水の音をきいて歸つて來ました。

しかし、そんなことより前に、私は貌鼻溪のことをお話ししなければなら
ないのです。私は途々男の兒達と話し合ひました。こんなつらい思ひを
して、こんな烈日に照されて、そして目ざして行く溪が平凡だつたら、隨
分馬鹿々々しい。しかし世間にはさうしたことがよくある。さうした落ち
はよくある。『大抵はそんなことさ』かう私は男の兒達に言ひました。あた
りの平凡な山地から推しても、または水が乏しく、たまたまあつても温い
つまらぬ溪流なのから考へても、何うしてそこにそんなにすぐれた山水が

まらうとは思はれない。世間知らずの田舎の人達の自畫自讃にすぎないだ
らうと、私は長阪の町に入つた時に既に失望してをりました。それに、そ
の溪のあるといふ沙鐵川といふ川が、いかにも小さく青い藻などが浮いて
ゐるものからして、私にうんざりさせて了つたのでした。

ところが、何うでせう。舟を溪上に放つて、一步一步入つて行く溪の邊
さは！ 岩石の奇は！ またその雄大なる形は！ 私は驚いて了ひました。
勿論水はさうよくない。紀州の瀨八町に見るやうなあの清さと美しさとは
ない。しかしその世からかくされた形、全く別天地をなしてゐるさま、お
伽話か何かでもなければ見ることの出來ないやうな、不思議なシインはこ
の他に何處に私はその匹を求めることが出來たでせうか。

耶馬溪とは、形も感じも違ふ。それから平泉附近にある殿美溪などはと

てもその幽邃雄大な點に於て及ばない。月の瀬の谷も及ばない。唯、紀州の瀨八町がこれに似て、そして水に於てすぐれてゐるが、しかし形と岩石とに於ては、彼、是れに及ばざるものがあるのを私は思つた。この岩石で瀨八町の水を持つてゐたら、それこそ何んなに好かつたか知れない。

つまりは、この沙鐵川といふ川が、上流も平凡、下流も平凡であるこの川が、一ところを劃つて、十二三町の間、全く上流とも下流ともかけ離れて、別天地をなして、そしてこの奇勝を見せてゐるのでした。丁度天才でも何でもない藝術家の作品の中に、唯一つ非常にすぐれたものがあるといふ形なのです。そしてそのすぐれた作が、水の質の清くないだけを除いて、大藝術家に拮抗するに足るだけの價值を持つてゐるのでした。不思議な氣がせずにはゐられません。

この溪の中には、鰻が澤山にゐます。それは耶馬溪の津民谷で食つた鰻と同じく、いかにも溪潭の中に住んでゐるものゝ味を味ふことが出来ます。丁度私が舟で入つて行くと、そこに鰻釣に來た男が二三人荅者を岸に置いて、そして休んでゐました。試みに、その蓋を取つて見ると、鰻が五六疋入つてゐました。

「今日はもう駄目だ………」

こんなことを言つて、そして私達の歸つて來る舟に乗せて貰つて歸つて來ました。かうしたさびしい溪潭の中に日を送るかれ等の生活も面白いではありませんか。かれ等は成るだけ大きな岩壁の岸近く舟を頼んで漕いで貰つて、そして鰻の住んでゐるさうなところを箱目鏡で頻りに覗いて見たりするのでした。岩壁の下には名は知らないが白い花などが咲いてゐました。

溪の入口には、大きな挽材會社などがあつて、そこに、溪の水を少くしないための瀬止がしてありました。

今日は朝早くそこを立つて來ました。朝の山の靄それも私には忘れることが出來ませんでした。二階から見ても始めは山巒の姿の髣髴も見えず、さながら靄の海のやうでしたが、それが次第に晴れて、山の尖や松やその連亘が段々あらはれて來るさまは繪のやうでした。

六時にはもう私達は草鞋を穿いた人でした。幸ひに、その朝靄は容易に晴れず、前の日のやうな暑い思ひをせずその山地の中を通つて來ることが出來ました。そして途中からは、私達は山を越して、北上の流域の方へと出て來ました。

あるところから見た北上とその向ふに連つた平泉あたりのさまとは、私

にこの古都のさまを十分に一目に見せて呉れました。秀衡時代には、東稻山の上まで練兵場が出來てゐたといふ話ですが、成程そこから見ると、北上の彼方の岸も、かなりに開けてゐたであらうと思はれます。

山地から北上の流域へとやつて來るあたりの平野には、麻畑が非常に多く、女や男がせつせとそれを刈つてゐましたが、私達の風體が不思議なので皆な手をとめて見てゐました。それもさうでせう、一人は袖なし一つになつて兩腕を出してゐる半白の男、二人は小倉の服の上衣をぬいで、シヤツ一つになつた少年、それが三人並んでてくてく歩いて行くのですもの、ある所では、えらく犬に吠えられました。

判官館へわたつて行く北上の渡場は、好い氣持がしました。舟は船頭の鼻が潜いて行くのでした。平泉の都の中心は、今、この川の流れてゐるあ

たりであつたさうですが、それを渡つたところに、柳御所址の標木が立つてゐるのなども非常に私にはなつかしう御座いました。

平泉の夏は暑う御座います。昔の跡を静かに探つて歩くにも堪へられなほほど暑う御座います。しかし、青田の中の路にキリギリスが鳴き、みそ萩などが赤く咲いてゐるのは、いかにも夏らしくつて好い心持がしました。そして安倍宗任の娘である基衡の妻の墓や、芭蕉の『夏草や兵どもの夢の跡』の石碑や、毛越寺の古い寺がさうした夏のシインの中に残つてゐるのも、私に『詩』を思はせずには置きませんでした。

K君——

今、私は五串の殿美溪に枕んだ瀟洒な旅舎の二階でこの筆を執つてをります。さつき達谷窟へ来る途中、脊梁山脈の方面に當つて、頻りに遠雷の

音がきこえ、黒雲が段々中空に漲つて来て、木蔭のない暑い田舎道を私達のためのやうに涼しくして呉れましたが、しかしその夕立は遂に此方まではやつて来ずに晴れて了ひましたが、筆を執つてゐる最中、前の殿美溪の水聲が急に高く凄じくあたりに鳴りわたつて、人々がかけ出して行く氣勢をきいて、私も何事かと筆を措いて急いで外に出て見ました。天巧橋の橋の上には人が大勢集つて見てゐる。何かと思つたら、それはさつきの遠雷がこの上流地方に夥しい夕立を齎らして行つたらしく、俄かに濁流が巴渦を巻いて押し寄せて来たのでした。山の涼しさは忽ち欄干に満ちました。

明日は険しい山路を八里、脊梁山脈中の巨峰として名高い栗駒山の殆ど頂近いところにある須川温泉に行くつもりです。そこは千五百米以上で、

今でもあはせ裕が欲しいといふことです。そして明後日は、東北唯一の溪山と言はれる小安川こやすがはの溪谷に入つて行くつもりです。それでは――

秋の京阪の二日

秋は深くなつた。紅葉、あつて蘆荻、赤の草の實、葉の落ちたあとに残つた柿の實二つ三つ、碧くくつきりと晴れた空――。

奈良の古都に一日行つて遊んだ。東京の友達に繪葉書を一枚書く。その言葉に、『蘆荻の白と柿の實の紅との交錯した佐保川のかれがれな水を指し

ながら、靜かに奈良の古都に入り申し候、一人旅も興多く候、東京の郊外とは違つて到る處名勝古蹟に満ちたるがうれしく候』

濱寺公園では、『松のみやひそかにふしを合はすらん離れ座敷の妹がつま
彈』

夕暮近くK君と濱寺の海邊に出て見た。ふと見ると、大きな灼金のやうな丸い光くわう輝のない日輪が今少して波に接吻しやうとしてゐた。『あ、好い、見給へ』かうK君は指した。やがて日輪が波に觸れたと思ふと、ぢき二分三分と沈んで、すつかり沈んで了ふのも瞬まはたく間であつた。顧ると、岸の松林の上に十四日の月が白く出てゐる。『日は西に月は東に海と山と打むかひ

てぞ暮れを待ちける』平凡だが、何處かでさうした気分がした。その後、熊谷直好の歌に、是と同じやうなのがあつたのに氣が附いて調べて見る。『日は海に月は山より此夕出るも入るもあかぬ影かな』といふのであつた。矢張古人もかうした落日の眺に對したことがあつたのであつた。

x

京都ではK君の情けで、桂園翁の墓を初めて展した。『またぬ青葉』の中の夫人の墓の前にも私は手を合せた。

x

『桂園一枝』や『浦のしほ貝』などに詠んである歌の寫生氣分を今度ほどしみじみと味つたことはなかつた。岡崎や黒谷が東京の一部を移したやうな繁華なところになつても、それでもその時分の地勢や情調や氣象は依然

としてそのままである。それは丁度京都でなければ見られないやうな秋霧の深い朝で、その中に縁を靡かせた柳、半ば隠れたやうになつてゐる橋、霧の一とこ破れた間からをりをり現はれて見える山、何うしても『桂園一枝』や『浦のしほ貝』あたりに見る情調である。私は朝霧が次第に小雨になつて行くやうな町を、車で祇園の方へと急いだ。

x

今度泊つた京都の旅舎の日本式のズランダと言つたやうな處で、私は月光の中に薄く線を引いたやうに靡いてゐる東山連嶺を眺めた。大文字、比叡あたりまでそれと微かに指さされた具合は何とも言はれなかつた。私は靜かに右顧左盼した。千年來の古都といふ感じが、チラチラする灯の影や、鴨川の水の音や、をりをり響いて來る電車の音に雜り合つて私の胸に迫つ

て来た。

x

大阪の旅舎では、朝起きた二階のすぐ下に堀割の水が澄んでたぶたぶ滲えられてあつて、その上を軽い櫓の音と共に舟が静に通つて行く気分が私の心を惹いた。流石は秋だ。秋の水だと私は思つた。

x

生駒山脈を貫通したトンネルを出て、それから奈良の古都まで行く間の地形は、大阪平野からトンネルまで行く間よりも、ぐつと趣致に富んでゐるのを私は見た。そこは低い丘陵の起伏したやうなところで、小さな谷あり、小さな村あり、折れ曲つた溪流あり、萱や薄に當る夕日あり、赤い柿の實あり、黄熟した山合の狭い水田あり、そしてそれが段々奈良の古都の

ある平野へと出て行つた。西の京近くなると秋篠寺を左に、菅原寺を右に、唐招提寺の大きなあの古い金堂もそれと指さし、れ、ば、天人飛翔の水烟を持つた薬師寺の三重塔も松樹の間に隠見した。私は旅情の漲るやうに押寄せて來るのを感じた。

x

その電車には、途中の停車場から、秋葉菓の一杯についた枝と赤い枝柿と松茸を刈つて薄に包んだのを持つて乘つて來る人達などがあつた。田舎の秋がそこにあるやうな氣がした。

x

いくらすぐれたい、聲の持主であつても、その相手の姐さんの三味線に頓着せずに自分だけ十分の聲を出すやうな妓はすぐれた妓ではないといふ

ことを知った。また、いかにすぐれた獨唱の聲樂家でも、眞に自分から動かされたものでなければ、聽者を動かすことは出来ないものだといふことを知った。

東京の近郊一匝

一

東京の近郊は、ちよと見ると、さう大して面白い處がありさうに思はないが、仔細に探つて見ると、大阪、京都の近郊などではとても味へない詩趣がある。勿論、それは古蹟とか名勝とか言ふものではない。歴史上の

跡は、とても上方には敵しないが、その代りに、原始時代の氣分が非常に多く残つてゐて、『詩』や『繪』になるやうなところが到る處にある。

林の美、水郷の美、野の美、雲の美、さうした自然美が非常に饒い。何處に行つても私達は林の私語を聞くことが出来る。水車のひとりさびしくめぐるのを見ることが出来る。帆の影を見てそこに川があるのを知るやうな光景に邂逅することが出来る。月遠し殘夢茶の煙と言つたやうな野趣を見出すことが出来る。廣い、廣い往昔の武藏野に縦横にいついた路には、何んないろいろな世離れた靜かな遠い昔がまだ残つてゐるであらうか。

私なども青年時代には、あの江戸名所圖繪を携へて、よくこの廣い近郊のあちこちを歩いたものである。今では、東京の近郊を書いたものは澤山に出来たが、それでもあの江戸名所圖會は、東京の近郊を歩くのに、屈竟

な案内者であることを失はない。あの書の中の挿繪は、大抵寫生で出來てゐるので、多少は誇大的のところはあるにしても、すべて本當である。決して人を欺いてゐない。今日の案内記の中の寫眞などよりももつとぐつと面白いものであつた。

しかし、昔の人は、大變であつた。交通の便も何もない時分に、あれだけ詳しく探るといふことは、並大抵のことではなかつたに相違ない。あの書がその人一代で出來ず、その子はその跡をついで大成したといふものも尤もだと點頭かれる。思ふに、東京の近郊の趣味は、繋つてあの一巻にある。あの一巻があるために、平凡なシンも平凡でなくなつてゐる。田舎の荒祠も、邊陲の一廢寺も、小さな里川も、何でもない林木もすべて詩趣を帯びて來てゐる。あの一巻がなかつたら、今日と雖も、東京の近郊はこれ

ほど遊子の心を惹かなかつたかも知れない。

二

東京の近郊は、西郊、北郊、南郊、東郊といふ風に昔からわけられてゐる。西郊は林の美を以てきこえてゐる。南郊は半は野、半は海の美を以て知られてゐる。それに對して、東郊は水郷に富み、北郊は野や杜に富んでゐる。何と言つても、東京の都會に近いあたりは開けてゐるが、少し奥に入ると、まだこんな田舎かと思はれるやうなところが決して尠くない。

しかし今では、電車、汽車が出來た。南郊には東海幹線、神奈川電車が、あるに對して、西郊には玉川電車、京王電車が、更に北して、武藏野、東上の二軌道線がある。北郊には、信越線の主線を始めとし、やゝ東に偏

つて東武鐵道の線がある。東郊には、常磐線の本線、それから小利根河畔の野田に至る支線、本所押上を起點にして市川船橋に達する京成電車がある。すべてさうした近郊探勝者の便に供せられてゐる。行つて見るつもりならわけなく何處へでも行くことが出来る。

先づ南郊から始めて見ると、品川の町がすでに面白い。東海寺の古刹、天王山、海晏寺、鮫洲の海岸、それから進んで、鈴ヶ森あたりの海も好い。この附近は、神奈川電車の駛走するところだが、大井といふ地名が、昔の驛遞の中にも見えてゐて、古くから道路の衝に當つてゐるのを知ることが出来る。大森の海岸、森ヶ崎の海岸、羽田の穴守から辨天附近に至るの海岸、今はやゝ開けすぎた感があるけれども、それでも春の一日の行樂には持つて来いである。羽田の漁村らしい感じも都の人達にはめづらしい。六

郷の川岸にも、春は水彩畫のやうなところが處々にある。ところに由つては、蘆荻の一面に茂つてゐるやうな水郷らしい感じのするところもある。川を渡つて川崎の大師、これは北郊の西新井の大師と共に、常に賽客の多く集つて來るところで、神奈川電車は岐れて此處までやつて來てゐる。このあたりに昔酒戦をやつた酒豪の子孫が残つてゐて、今だに大きな盃を藏してゐるのも面白い。新田の家臣亘理某がその主の遺髪を此處に携へて來て、全く土農化して了つた形も、いろいろなことを私達に思はせた。川崎の手前の蒲田の菫浦も初夏の頃には、繪のやうなあざやかなシインをそこに展けて見せた。

東海幹線近くでは、大井から谷垂の方へ入つて行くのも面白い。新緑の候などは、林の緑が深いので殊に好い。大森の停車場前にある八景園は、

梅の名所としても好く、海の眺望臺としてもかなりにすぐれてゐる。それから十町ほどで、池上いけがみの本門寺ほんもんじに行く、流石は日蓮の最期の地だけあつて寺も大きく樹も古く、決して凡でない。その東にある丘かみに凭よつてつくられた明ほの樓上の眺望は、南郊では、海を眺めるのに、殊ことにすぐれた地點の一つとして數へて好いであらうと思ふ。梅の頃もまた好い。これから六郷ろくごう河畔かはんに近く新田義興にいぎきの矢口やぐちの渡わたに行つて見るのも好いし、西北に入つて、洗せんの池いけの畔ほとりから、世田ヶ谷せたがやの方かたに出て行くのも興がある。六郷ろくごう河畔かはんは、やゝ水郷らしい感に富んでゐて、釣魚つりに適した箇所も處々にある。原村の梅も此頃は大分出かけて行くものが多いといふことであつた。

六郷ろくごう川がはを渡つてからも、大分此頃はひらけた。鶴見つるみは例の總持寺そうぢじが出来てから、面目と一新した。花月園くわげつえんなども、春に、秋に、出かけて行つて面

白いところであらう。更に進んで生麥なまむぎに行くと、例の島津家しまづけの藩士が外人を斬つた跡が今日でも残つてゐる。新子安しんこやすあたりの海水浴も、忙しくつて遠くに出かけられない人達の爲めに賑つた。

横濱附近、東神奈川から八王子に行く汽車の線路附近、このあたりも、近郊散歩者の區域くわくとして差支ない。横濱よこはまには本牧ほんもくの鼻はな、根岸ねぎしの競馬場けいばじやう、更に遠く杉田すぎたの梅林はかりんあたりまで行つて、それから金澤かなざはの方へ抜けて見るのも、近郊のトリップとして面白い行程だと私は思ふ。杉田の梅はさう大して好いとは思はないけれども、海の梅林としては、日本にも他には澤山類がない。金澤八景は今衰へたけれども、また海軍の要塞地帯えいさいちたいのために、生魚は昔のやうに多くは得られぬけれども、あの潮入しほいりの入江いりえの旅館に、靜かに一夜泊つて見るのも、旅の興として面白いであらうと思ふ。

三

西郊では、やゝ南に偏して、**豪徳寺**、**松陰神社**、**世良田城址**あたりの春は好い。秋もまたわるくはない。寺にも細かく探るといろいろな寺がある。五反田、桐ヶ谷、目黒。あのあたりも非常に展けた。今は新田義興の夫人が衣をかけて水に投じて死んだといふ傳説のある衣懸松もなくなつて了つたであらう。目黒の栗めし、竹の子めしは、昔は名物であつたが、今は何うか。例の比翼塚に花を手向けるものも少いであらう。祐天寺、それから佛像の澤山にある寺、あそこいらは秋の晴れた日に歩くのに最も適してゐる。

澁谷の道玄坂下を起點とした玉川電車は頃刻ならずして、人を多摩川の

ひろびろした流域へとつれて行く。この間には竹藪が多い。筍なども澤山に出る。電車の終點は、既に多摩川で、その岸には、鮎狩を目的にした料理屋が澤山に出来てゐる。初夏禁漁の解けた時には、かなり雑選する。しかし私はいつも川を渡つて、二子の龜屋に行つて酒を飲むのを例としてゐる。その二階が好い。家を取巻いた禰の古樹が好い。はるばると河原を見渡した形が好い。

これから、久地に出て、梅を見て、用水に添つて、榎戸から登戸の方へ行く路は、決してわるくない。それは丁度多摩の横山の裾を縫つて行くやうになつてゐるが、割合に野といふよりも山といふ感じに富んでゐて、特色がある。そして登戸から川を渡つて、京王電車の布田河原あたりに出てそして歸つて来る。

概して西郊では、この多摩川を隔て、多摩の横山を望んだ形が好いのである。野を越えつくし、林を通り盡して、前に多摩川を豫想したその横山の蜿蜒を見るのが好いのである。國分寺から府中に行く路、布田から布田河原に行く路、立川の普濟寺あたり、すべて皆なその形が好い。新宿の追分を起點にして京王電車の沿線では、先づ最初に十二社がある。しかしこれも決して昔のやうに感じは好くなくなつて了つた。銀世界の梅のなくなつて了つたのも惜しい。大山園、吉田園など、いふ小さな庭もあるが、これなどは大したものはない。先づ此線では、布田町の北半里にある深大寺、布田河原の鮎漁、更に遠く府中の大國魂神社などであらう。深大寺には國寶の佛像がある筈である。私は曾て、晩春の頃に、中央線の吉祥寺驛で下りて、井の頭辨天に賽し、それから田麩の間を経て、深大寺に

詣で、布田から登戸を経て二子の方へ出て来たことがあつたが、林の美しかつたこと、野の美しかつたことは、未だに忘るゝことが出来ない。府中の大國魂神社は、この線で行つても好いが、それよりも、小金井の花でも見て、それから國分寺の址を探つて、次第に其方に出て行く方が順路だ。それには先づ井の頭辨天から始める。此處は今では電車が出来たから、わけなく行けるが、ちよつと小ぢんまりして好い。晩春、初夏の頃、大きな樹に藤の花の縋つて咲いてゐるさまなど繪のやうである。小金井の花もあの清淺な屈曲した水があるので好い、國分寺の址は、停車場からレイルを越して十町ほど、未だにその礎石が残つてゐる。桃櫻相映じ、幽禽呼びかはしてゐるさまは、西郊屈指の散策地であらうか。府中の大國魂神社の大きな樺の古樹は見事だ。

これから分倍河原の古戦場を經、川をわたつて百草の松蓮寺に行く。こゝは東郊の國府臺と相並んで、登臨のすぐれた地點として昔からきこえてゐるところであるが、今はこの二者以上に、すぐれたところがあちこちに發見されて、その名を擅にすることが出来なくなつた。坂戸の物見山、飯能の天覽山などが即ちそれである。

この他、この附近では、立川の普濟寺、立川河原の鮎漁、高幡の不動、更に遠く入つて行けば、例の八王子の先きの高尾の翠微などもそのトリツブの中に入れて然るべきものであらう。

武藏野、東上二線の沿線も、亦西郊に層するべきものである。最も近く、豊島城址のある三寶寺池あたり、新高野山の稱ある寺のあたり、まださう大して開けてゐない形が却つて好い。川越街道を板橋から白子へと出て、

膝折を通つて、この街道の線と東上線とは相並んで駛つてゐる。それから少し行つたところにある平林寺は好い寺だ。そこにはあまり世に知られない梅林などがある。それに、此處等は全くの武藏野で、未だにその時代の原始的面影が歴々と残つてゐる。境内に關原の猛將増田長盛の墓などのあるものもなつかしければ、業平の野火止塚があるのも面白い。これから志木に出て、武藏野開墾の用水のいろは樋の址などを見て引かへして堀兼井に向つて行く。

堀兼井のあるあたりは、殊に昔の武藏野の氣分の多く残されてゐるのを私は見た。そこは國分寺川越間の線路の入會驛から入ると一番近いが、それでも一里位はあつた。此處等まで入つて來る近郊の散策者はまあめづらしい方だが、一度は行つて探つて見るべきところであると私は思ふ。

所澤の「一つ手前の（國分寺から行つて）東村山驛は注意すべきところである。何故なら、そこからはいろいろな所に行つて見ることが出来るからである。武蔵野の義貞時代をまざまざと目に見せるやうな元弘戦死碑はそこから、半里と隔つてゐない徳藏寺にあるし、義貞の高等司令部を置いたといふ新幡の富士もその近所にあるし、道興准後のくめくめ川と、日蓮の曼陀良淵もすべてその近くにあるからである。武蔵野線の東所澤驛は、最初は小手指と呼ばれたが、實際そこらは、昔のまゝに武蔵野が依然として残されてあるやうな氣がした。林なども多かつた。

狭山の丘陵の中も、一日行つて遊ぶには好い。殊に、春の蕨の出る時分など。

更に遠く入ると、飯能町の繪のやうな市街、秩父の武甲山の翠微、名栗

川の清い溪流などがあらはれて来る。天覽山の眺望も亦捨て難い。

四

東上線で川越まで行つて、川越の町を見物し、喜多院に詣で、それから電車で大宮の方へ出て来るのも面白いが、川越から坂戸の終點に行つて、物見山に春は蕨、秋は初茸狩をするのも興味が饒い。

更に馬車を驅つて、秩父の山巒に向つて進むこと二里、と、其處に四面丘陵に圍れてさびしく文化に取残されてゐる越生の町がある。いかにも田舎町で他に見るものとはないが、感じが素樸で、世離れてゐて、ちよつと面白い。それに、この町から十二三町山の中に入つて、梅園村に津久根の梅林がある。梅花の候になると、いつも新聞に、新月の瀬の梅として、

その花の消息の報道せられるものである。成ほど四圍の山巒ののんびりした形は、月の瀬に似てゐる、梅の多いのも或はこれに譲らないかも知れない。しかし惜しいことには、越邊川の溪谷が小さく且つ凡で、とても月の瀬の名張川に匹敵することは出来ないが、しかし、東京附近の梅溪としては、何と言つてもこれが一番である。青梅の先きの日向和田などよりも此の方が確かにすぐれてゐる。それに、その奥に黒山の鑛泉がある。わかし湯で、綺麗と言ふわけには行かないけれど、生椎茸か何かで酒を酌みながら静かに一夜を過すのも興味が多いだらうと思ふ。私はこゝから、秩父の山巒の裾を縫つて、山野と丘陵の交錯した間を荒川の沿岸まで出て行つて見たが、その道も決してつまらないものではなかつた。その途中にある小川といふ町も面白かつたし、荒川の岸にある北條の鉢形城址も私の感興

を渺なからぬ惹いた。私は荒川をわたつて、寄居町に出て、それから汽車で秩父の長瀬の方へと入つて行つた。そしてそのあくる日は、更に峠を二つ越して、上州の鬼石町に出て、神流川の美しい山水を見た。此處等あたりに来ると、もうすつかり東京の近郊といふ氣分を離れて了ふ。信越線の沿線では、赤羽から川口町附近、のあたりは、水郷らしい感じも伴つてゐて好い。隅田川の上流は、とても巴里のセイヌのやうには行くまいけれど、帆影が重り合つて、柔體の聲が靜かに水を渡る氣分は捨て難い。例の女學生の春の修學旅行などによく行く浮間ヶ原あたりものんびりしてゐる。櫻草も美しい浦和は別に見るものもないが、あそこから、荒川を渡つて、東上線の志木に出て来るあたりは、ちよつと變つた郊外散歩區域である。與野の公園は、衰へ果て、了つてゐる。大宮の氷川神社境内

にある公園も、普通のトリップには、ちと規模が小さすぎる。

此處等でもちよつと面白いと思ふのは、東北線の蓮田驛はすだえきから原市はらいちに出て、それから、中仙道なかせんどうの副路である路の菖蒲あやめ、騎西きさいの方へ出て行く計畫である。こゝらには文化がまた至つてゐない原始的の氣分が非常に残つてゐて、林あり、草藪くさやぶあり、それに荒川の残水路などがあつて、秋などの散策には持つて来いである。

飛鳥山あすかやま、瀧の川、このあたりも昔は静かで、ラスチックで、感じの好いところであつたけれど、今は郊外氣分は十中八九はなくなつて了つた。田端たんぱから、一田圃いちたんぼ越して、尾臺おびだいの渡をわたつて、荒川堤あらかはづみの櫻を見に行くのも亦面白い。

此處等はもう已に北郊に屬してゐるので、西郊、北郊の區別は、荒川の

一水を以て劃つて然るべきであらうと思ふ、川口町かわぐちまちから奥に入つて、鳩ヶ谷たよがや、大門、岩槻いはつきあたりにもものんきな好い氣分は漲りわたつてゐるのを見るであらう。

岩槻いはつきは往昔の奥羽街道おくうがいのちだうの衝に當つた古い町だけあつて、一種特色ある氣分に富んでゐる。近郊散策者の決して捨て、置くべきところではない。歴史上から見ても、地形から見ても面白い。例の太田氏おほだしの上杉うへすぎと對抗した城址なども依然としてその址を存してゐる。それに、この附近を流れてゐる中川なかがはが好い。東京近く入つて行つて、新宿にしじゆく、小松川こまつがはあたりでは見ることの出来ない蘆荻あしやぶと橋梁けりやうと帆影ほかげとを見ることが出来る。そこに行くには、信越線しんえつせんの大宮おほみやから行けば、乗合の自動車がある。私は、曾て東武線とうぶせんの粕壁驛かすかべえきからそこに行つて、夕飯を岩槻いはつきで食つて、夜の路を大宮おほみやへと出て歸つて来た

ことがあつた。面白い秋の小旅行であつた。

五

本所業平を起點にした東武鐵道の沿線にも、郊外散策者の喜ぶやうなところが澤山にある。堀切の菖蒲、綾瀬の三叉、ぐつと右に入つて、葛西の古蹟を探り、中川の流をわたり、柴又、小岩あたり、所謂東部の水郷を探ぐるのも、この線から行つても好いが、それはあとで書くことにして、少し進んで西新井の大師がある。荒川堤の櫻がある。草加あたりも昔の奥羽街道の一驛らしい氣分が今でも残つてゐてちよつと特色がある。蒲生驛から西に一里、安行の植木は、北郊では特に指を屈しなければならぬところだ。地には別に風景があるとか何とか云ふのではないけれども、春は百花

が亂開して、丸で花園にでも行つたやうな氣がする。殊に、中でも晩春の躑躅が見事だ。越ヶ谷、市川、中山の桃などよりも數等趣に富んでゐるのを私は見た。

越ヶ谷には、梅も、桃もあるが、それは多く見るに足りないが、そこから松伏に出て、利根をわたつて、野田の公園に行つて見るのは春の一日の行樂として頗る上乘なるものである。第一、松伏の水郷が非常に好い。中川と葛西用水とが互ひに相交錯して、垂楊と蘆荻と互ひに靡き合つてゐる形は、ちよつと東京附近にはめづらしいほどである。ことに、螢の時分は何とも云はれないほど見事であるといふことである。

次に、小利根の野田の渡頭が好い。帆影聲と相雜るといふ趣がある。野田の公園は座生沼に臨んで、遙かに數村の桃の花を望むといふ形で、大

町桂月氏なども、桃では近郊第一だと言つてゐるが、決して過言ではない。で、歸りは野田町から小軌道で、常盤線の柏驛に出て來られる。野田の下流の流山町あたりも、水郷らしい氣分に富んでゐて好い。

越ヶ谷から先には、粕壁の藤がある。こゝにも人はよく出かけて行く。一農家の庭にあるものでさう大してすぐれてゐるとは思はれないが、藤の幹はかなり太く、花の房も長い。一度は行つて見るべきものであらう。杉戸、幸手あたりもわるくない。幸手から権現堂へ出て、大利根をわたつて、關宿から境へ出て、それからずつと平將門の遺址を磐井に探り、鬼怒川べりの水海道町に行き、下館線で歸つて來るのも、決してつまらない行程ではない。利根川の帆影を見るには、東京近くでは、先づ此處等が一番すぐれたところであらう。

久喜では古城址と足利政氏の墓のある甘棠院を探るべしである。こゝから、東北線に乗替へて、栗橋の例のいなり屋の二階で、利根の白帆を見ながら、旨い鯉のあらひに浅く酒を酌むのもまた捨て難い。いなり屋は、以前に比べて、やゝ衰へた形であるが、それでも前の日にはがきでもやつて置けば、喜んで迎へて呉れる。初夏の頃などは、殊にその水棲の二階の一間が忘れ難い。

加須、羽生、それから利根を渡つて、上州の館林附近に二三見るところがある。例のお伽話の分福茶釜、躑躅と沼とできこえた館林の花山が即ちそれである。分福茶釜は、釜そのものよりも、その藏した寺に行く途中の松原などが好い。城址の躑躅は、今は昔に比して、木が小さくなつて了つたけれども、沼の遶繞した形、またその沼がいかにも古い錆沼であるとい

ふさま、町の辨天祠から小さな田舟を櫂で操つて、蘆荻の新芽の緑の浅い、狭い掘割のやうなところから段々ひろい沼に出て行く気分が好い。麥落雁がその町の名物である。鮎のあらひも味が好い。

これからもつと先に行くと、足利の公園、行道山、その次に太田の香龍新田義貞の遺髪を埋めた金龍寺、眺望の好いのできこえてゐる金山、少し遠走りすぎたけれども、まアそこいらまで行つて見るのも、さう臆却ではない。

この他に、利根川を見るのに好いのは、赤岩の新田屋である。それは栗橋のいなり屋と共に河魚料理を以てきこえてゐる家だが、交通が不便なためこれまで餘り人は出かけて行かなかつた。しかし今では、館林から小軌道が小泉町まで出来て、それから一里半位しかないから、春先には、のんき

に歩いて行つてもわけはない。そしてそこに一夜泊つて、靜かに田舎の春に酔つて、歸りは川をわたつて、妻沼の聖天に賽し、馬車で熊谷の停車場へと出て來ることが出来る。

東郊は常磐線、房磐線の汽車の駛走するところである。海の東郊、水郷の東郊は即ちそこにある。葛西、小松川附近からかけて、葛飾の眞間の手兒奈祠のあるあたりまでは、昔は海であつたらしく、宗長の「東路のつと」の中にある今江の淨興寺の記事を見ても、その時までそこらは一面の沮洳地であつたことがわかる。今は、京成電車が本所押上から出て行つてゐるので、行くにはそれによるを便とする。柴又の帝釋、川にのぞんだ川甚の鰻も旨い。小岩あたりに古寺を探るのも好い。市川から國府臺にかけては秋は殊にすぐれた散策地だ。

今井から宇喜田の方へ出て、小利根の河口の蘆荻を見るのも、一日あれば足りる。この方面は、近郊散策者も餘り多く入つて行かないから、却つて逸興が多いであらうと思ふ。菖蒲の新しい色彩があゝの行徳の古い町を飾つてゐるさまも私にすぐれた『繪』を思はせた。

中山の法華經寺、八幡の八幡知らずの竹藪、更に進んで、稻毛の海水浴のあるあたり、すべて皆面白かつた。房總線の沿線は、春は菜の花の黄が麥の緑と相掩映して、雲雀の高く空に囀りあがるさまなど、何とも言はれない氣がした。

六

かうした近郊を持つた大都會の周圍を更に、更に大觀して、鳥瞰的にこ

れを見ようとするには、淺草の十二階に登つて見るに限る。そこに登れば、飛行機の上から見たに庶幾いひろいひろい眺望を一目にあつめることが出来る。

東から南にかけては、東京灣の晴波が手に取るやうに見える。上總の鹿野山、更に遠く遠く安房の鋸山をも見る事が出来る。南からやゝ西に偏つては、東海の帝王富士が美しく落日の金色に輝きわたつて聳えてゐる。箱根連山が見える。丹澤山塊が見える。それからやゝ離れて獨立した相模の大山が見える。西から北にふれては、多摩、秩父の連山、その中では、あの武甲山の丸い姿がくつきりと群を抜いて見える。その奥に白く光つてゐるのは、甲斐、信濃の高峰である。そしてこの秩父と北の日光山群との間の平野には、利根の一水が溶々として流れて下つてゐるのである。一面海

に、三面山麓に環のやうに取巻かれて、中に日本の首府を持つた平野の潤さよ、また美しさよ。

秩父の山裾

—

坂戸の終點から乗合馬車で秩父の山麓に向つて進んで行く心持は、都會の煩累を離れて一步一步大きな自然の懐に入つて行くやうななつかしい感じであつた。あたりの人達ももう都會人ではない。その人達のする話も、山の話、材木の話、田野の話、町の市日の話などである。次第に山の翠微

は近く、細かく刻まれた巖に、髪のやうに青く黒く林の連つてゐるのがやがてはつきり見え出して來た。一緒に乗つてゐた歸休兵の一人は『國の山は好いな、矢張、木が多いでな』かうなつかしさうにその伴侶の一人に言つた。

路はやかて丘陵の中に折れ曲つて入つて行つた。越生の町はもう近いのである。大都會の近くにありながら、全く文化に離れて存在してゐたやうな町、汽車を待ちこがれて居りながらまだ容易にそれを得ることの出來ないやうな町、秩父の山麓の裾に徒らにさびしく烟をあけてゐるやうな町、その越生の町の入口は、やがて私達の前に展けられて來た。

町の中ほどに來て、馬車は留つた。想像した通り、果してさびしい衰へた町であつた。裏町といふ裏町もなく、唯、一筋に鍛冶屋を置き、呉服屋

を置き、小料理屋を置き、郵便局を置き、荒物屋を置き、旅籠屋を置いたやうな町であつた。午は既に過ぎてゐるので、私達は空腹を満すべく、取敢へず、町で一番大きいといふ右側の旅舎に入つて行つた。

明るい二階の間で、私は馬車の中から懇意になつた半ば農夫半ば材木商らしい五十近い品の好い田舎の紳士と牛鍋を一緒にして淺く酒を酌んだ。一緒につれて來た子供達には逸早く午飯の茶碗を渡しつゝ……。

腹が空いてゐた故か、その牛肉は割合に旨かつた。紳士は丁度私達の行つて見ようとする津久根の梅のある梅園村の人で、一昨日今年十三になる男の兒を川越の中學に入學させるために伴れて行つた歸途であつたが、男の兒を私が二人伴れてゐるのをなつかしく思つたらしく、何彼と親切に津久根の梅の話などをして呉れた。「もう、梅は遅い。まだあるにやあるが、

どうせ見に来て下さるなら、盛りでなくつちやいけない。折角、見に来て貰つて、つまらないと思はれてはしやうがないから』など、言つて笑つた。子供達には、突然逢つた見ず知らずの他人とかうして打解けて、牛鍋を一緒に突ついたり、盃のやり取りをしたりする父親が不思議に見えたらしく、頻りにじろじろとその紳士の方をのみ見てゐた。

その紳士は町から十三四町ある津久根の梅溪まで一緒に私達を伴れて行つて呉れた。紳士は家に持つて行く土産を、この町では一番そこが好いといふ小學校の前の菓子屋で買つたりなどした。一步一步町は次第にさびしく、段々場末らしいカラアを帯びて來たが、それに引かへて、四面をめぐる山巒は漸くその連互を歴々と見せて、雲がふわふわと、その峯から湧き出すさまなどが面白く見え出して來た。私とその紳士とは絶えず話しなが

ら歩いた。

津久根の奥にある黒山の鑛泉の話などを紳士はした。段々訊くと、その黒山の村の人であるといふことである。そこから秩父の大宮を越して行くブナ峠の話をした時には、「雪はもうあるめえが、子供さんを伴れてゐては樂ぢやないな。それより矢張小川の方から入る方が好い。」かう言つてそこは近いには近いが、かなりに峻しい、人通りのない裏山道だといふことを話した。

津久根の入口に来て、「こゝから、梅だ……ゆつくり見て行かつしやい。もうこの通り遅いが」かう言つて、帽子を取つて、半ば禿けた頭を見せて、そして別な路の方へとわかれて行つた。

「掌の大きな人だね。僕の倍位ある」

弟の方の男の兒は、少しこつちに来てから言つた。

新月の瀬と言はれる津久根の梅——さう言はれるために、何うしても本當の月の瀬と比較する氣にはなるが、また月の瀬と比べては、その溪といひ、その位置といひ、またその梅といひ、とても比べものにならないほど劣つてゐるが、しかも東京附近の梅溪では、これでもすぐれた立派なものとしなければならなかつた。無論、原村、蒲田、多摩川の吉野、あそこらの梅よりは、遙かに此方がすぐれてゐるには相違なかつた。それにつけても思ひ出さるゝのは、その大和の月の瀬の梅溪であつた。

あの名張川ほどの生色を持つてゐなくつても好いが、せめてはその越邊川の谷がもう少し美しい瀬を持ち、もう少し潺湲とした流を持ち、もう少し多い水量を持つてゐたならばと私は思つた。梅も平地にはかり並べて

裁ちられてあるのでなしに、山の峽、山の狭間、谷の底などをも白くして呉れてゐたならばと思つた。

しかし、この梅溪が新月の瀬を言はれる理由は私にもわからないではなかつた。實際、四圍の山巒——のんびりした、または緩やかに遼繞した、頂きの斜面に形の好い松などの並んだ、處々に谷が深く入り込んださまは、まことに月の瀬に酷肖してゐた。『感じだけは、何處か似てる。静かで、鷹揚で、のんびりしてゐる形は、關東の山とはちよつと思はれない』こんなことを私の兄の方の男の兄に言つてきかせた。

二

秩父の山巒の中に入らうとは思はぬでもなかつたけれども、思ひ返して、

それよりは寧ろ入らずに、その山巒の裾を縫つて荒川の流域に出て見るのも面白いと私は思つた。津久根の梅溪を出たところで、丁度運好く越生から小川に歸つて行くガラ空きの馬車の來るのに邂逅して、再び私達はそれに乗ることにした。

馬車の走つて行くあとに、或は獨立した山巒、或は雲の湧き上る峻峯、或は山合より流れ落ちる細い溪谷、或は繪のやうな桁の長く高い橋、或は人家、或は籬落、或は立つて此方を見送つてゐる汚れた手拭で額髪を巻いた子守、或はあとから追ひかけるやうにして來て、先に容易に抜け出るこゝとが出来ない自轉車、さういふものを残したり見たりして、私達は次第に山巒深く入つて行つた。津久根の梅溪を見てゐる頃には、空が曇つて天氣が變りはしないかと危まれたのに、今は次第にまた持ち直して、薄い午後

の日影が斜に山合の狭い田畠を照した。

普通の乗合馬車ならば、玉川から昔の北國街道の方へ出て行くのであつたが、歸りを急ぐガラ空の戻り馬車であつたために、「近路して行きませう」などと御者は言つて、右に取るべき路を左に取つて、山合から山合へ、村から村へ、馬の脚をとゞめさせぬほどに驅けさせて、青山、日影などといふ村の間に横はるさう大して大きくない峠を越して、日影の斜にさしわたる頃、漸く小川町近く行つた。

私はかうしたところに、かうした町を發見しようとは思はなかつた。私の持つてゐる地圖にも、さう大きく書いてないし、熊谷あたりから乗合馬車が小川に行くといふことは知つて居つても、何うせ山合のさびしい町位に思つてゐたのに、段々近づいて見ると、潺湲と流れた大きな溪橋を隔て

ゝ、夕日にかゞやく白堊、處々に林立した工場の烟突、豊かに渦きあがる夕炊の烟、それはちよつと思ひもかけないやうな賑やかな町にやがて私達は伴れられて行つた。

「好い町だね。こんなところにかうした町があらうとは思はなかつた」
かう私が御者に言ふと、

「小川は賑かですとも……。何しろ、織物の市が立ちますからね」

「越生よりもぐつと好いね」

「とても比べものになりはしません。こゝらでは一番です」

かう馬に鞭うちつゝ御者は言つた。

その夜一夜宿つた旅舎もまた私の氣に入つた。一番奥の間、その障子を明けると、田舎町の裏らしい人家や畠が夕日に染つて、その向ふにひろ

い關東平野を豫想させる長い赤褐色の丘陵が、形の好い松をその上に駢立させて、さながら塀のやうに連りわたつてゐるのを見た。赤い桃の花が島の中に二三本雜つて咲いてゐるのも、私に田舎町を味はせた。斜に對した樹立の中の建物は、警察署の裏に當つてゐるらしく、頻りに擊劍を習つてゐるシナヒの氣勢がした。私は淺く晩酌をし、子供達は菓子を食つたあとで、その夜は三人床を並べて敷いてぐつすり寝て了つた。

三

小川から荒川の河畔にある寄居町まで三里、この間は、坂戸、越生間、または越生、小川間よりももつと淋しい人通りのない道であつた。曉の山巒からは雲が絶えず湧くやうに騰上した。『情車出山驛、雲湧曉巒冥、籬落

兩三里、搖々酒未醒」かうした詩がひとり手に私の口の上つて來た。

これを此方に來ずに、小川から北國街道を本島村の方へ出て行くと、島山重忠一族の古址が到る處に散在してゐて、仔細に探れば逸興もまた妙くなかつたのであつたが、それを捨て、此方に出て來たのは理由があつた。私は切に荒川沿岸にある鉢形城址を探ぐることを望んだのである。

鉢形の古城址は、關東の歴史を讀むもの、必ず行つて見なければならぬところであつた。北條と上杉の對抗、川越に本據を置いた北條が、時には松山を奪はれ、また時には川越を空くして上杉の銳鋒を避けたことなどもありながら、遂にこの一帯の山地の守りを失はなかつたのは、その左翼の鉢形が要害の地形を占めてゐて、かねて常に敵の背後を脅かす形になつてゐたからであつた。私は長い間一度そこに行つて見たいと思つてゐた。

乗つてゐた乗合馬車が、鉢形にあと半里ほどのところで、車の轆を外して了つて、それを直すのに手間が取れさうなので、思ひ切つて私達はそれを捨て、街道から外れた捷路を松原や草藪の間にもとめて進んだ。次第に迫つた山巒は開けて、成ほど荒川の流域と想像されるやうな潤い潤い低地がその前にあらはれ出して來た。

『鉢形の城跡、鉢形の城跡？』

かう私達は何遍も何遍も逢ふ人毎に聞きながら歩いた。

松原を出て、さびしい村を一つ越して、それからスロオプをなした麥島の方へと出て行つたが、矢張城址に行くには、鉢形の聚落に出なければ駄目であるのが次第にわかつて來た。想像したとは違つて、その古城址はその鉢形の聚落からさう離れてゐないところにあつた。

それはさびしい村だつた。茅屋陋舎相續くと言つたやうなところであつた。丁度神武天皇祭の日で、國旗がところどころその茅葺の屋根を飾つてゐたりした。やがて私達はその搦手の址である溪橋のあるところへと行つた。

潺湲とした水聲がやがて私達の前にあつた。

急いでそこに近づいて行くと、橋の下には美しい繪も及ばないやうな溪流がひらけて、半は碧い潭を成して深く湛え、半は白い瀬をつくつて珊珊として流れてゐるのを見た。

『好いな』

かう言つて私達は橋の欄干に凭るやうにして眺めた。橋には搦手橋と書いてあつた。

そこを入ると、ちよとした廣場があつた。そこからは、既に一目に深く、大きく穿たれて折れ曲つて來てゐる荒川の流が覗かれた。鐵橋の工事中らしく、大工や工夫が頻りに小屋掛けなどをして、頻りに斧の音をあたりに響かせてゐた。

城址はもうすぐであつた。私は其處に、麥の緑の畑と、桑の畑と、それから隅に偏つて靡いた溪竹の籟とを見たばかりであつたけれども、しかもところどころに僅かに残つてゐる壘壁の跡や、濠の跡や、石垣や、小さな丘や、さうしたものゝ中から、仔細に昔の城のあとを探がすことが出來た。私は立つて眺めてそして四顧した。

畠に耕す農夫があつた。

「こゝだけですか、昔の城の跡は？」

私はかう訊いた。

農夫は鋤をとめて、腰を伸すやうにして、「そこが本丸の址でさ……それからずつと向ふに姫曲輪があるんですが……。さうですか、大手ですか、大手は丁度あこいらになつてゐるでせう」

かう後を顧みて指した。

「何か武器か何か掘り出すやうなことはありませんか」

「元はよくあつたさうですよ。村にも持つてゐるものがありますよ」

「今は出ませんか」

「今はもう出ねえな……」

また、鋤を使ひ始めるのをとどめるやうにして、

「何か昔のまゝで、残つてゐるやうなものはありますか」

「あの木がさうだ」

かう言つて、そこからさう遠くない小高いところに大きな傘を張つたやうな樹を指した。

「ふむ、あれがその時分からある木かね。……」

かう私は言つて其方を見て、「何の木だね」

「榎だんべえ」

私達はやがて其處を去つて、その小高いところへ行つた。カサコソする草藪、一つ二つ咲き残つてゐる野椿の赤い花、それにも昔の空氣がからみついてゐるやうな氣がして私はたまらなくなつてかしかつた。私達は榎の木の下に行つて、仰いで見、撫で、見、さてその下に草を藉いて腰を下した。子供達も、「その時分からある木なの？　これが？」と言つてなつかしさう

にした。春の午前の日影は麗らかにあたりに照つた。

私は昔のさまを想像した。長刀を挟んだ武士や、かつぎを着た姫達が此處等を往來したさまを目の前に浮べて見た。過ぎ去つた時の永劫即一瞬の空氣の深く身に沁みるやうな氣がした。

私は考へた。(成ほどさうだ。成ほど上杉がこの城だけは何うすることも出来なかつた筈だ。小川から越生を経て川越に通ずる路、即ち昨日私達の通つて來た路は、丁度要塞の中の路のやうな形を成してゐるではないか。小川町の北を劃つた丘陵は、その自然の城壁を成して、その内部を窺ふことを得せしめないやうになつてゐるではないか。北條方はいかにもその中で自由な連絡を取ることが出来る。鉢形のこの城を、上杉が持餘した筈だ。(來て見なければ本當のことはわからない)

かうつゞいて私は獨語した。

私達はやがて、そこから荒川の見える方の疎な林の中に入つて行つた。

何とも言へない雄大なシインがそこに開けた。荒川は大きな溪谷をつくつて、兩山の間を激怒憤越して流れ落ちて來てゐるのである。そしてこの鉢形の城址のある、その當時は立派な天嶮として役立つた數百仞の一面の絶壁に當つて、大きく東北に孤線を描いて、そして關東平野へと流れ出でてゐたのである。長瀨の溪潭が好いとか、三峰に至る間の山水が好いとか言つたとて、何うしてこれとは比較にならうと思はれるほどそれほどその眺めはすぐれてゐた。私は敢て言ふ、東京附近で、これほど雄大な眺めを持つた峽谷は他にはない、と。

「襟帶山河好、雄視關八州、古城跡空在、一水尙東流」かうした詩が、ひ

とり手に私の頭に上つて來た。

私は一時間以上もそこに彷徨した。感慨盡きるところを知らなかつた。

四

一桁の長橋靜かに荒川を渡つて、寄居の町に入ると、越生、小川などには丸で感じの違つた、山裾の町と言ふよりも寧ろ山口の町と言つたやうな印象が私を喜ばせた。私達は町で鉢形の繪葉書などを買つた。

停車場前の旅舎で、一時間ほど汽車を待つたが、その樓上から眺めた秩父の山巒も美しかつた。笠山の丸いのんびりした上に白い雲のふわふわと浮いてゐるのもなつかしければ、薄紫をした山の半面に明るく日がさしてゐるのも靜かであつた。そこからは、山の翠微を背景にして、工場の烟突

や、二階三階の瓦葺などがくつきりと空に捺したやうに眺められた。

熊谷から岐れて、荒川の東岸に添ひ、絶えず前に秩父の山巒を望みつ、次第に山の嵐氣の中に入つて来る様な上武線の汽車はやがてやつて来た。不幸にして、或は幸ひにして、丁度その日がこれから行かうとする長瀬の上にある寶登山神社の大祭に當つてゐたので、列車は殆ど全くその賽客で埋められてゐて、赤いメリンスの帯だの、草花の模様の出た襟だの、派手な褌袴の袖だのが、荒れた手や太い足や乾いた唇に不相應にヒラシヤラしてゐた。私達は辛うじてその一隅に腰をかけることが出来た。

波久禮に來ると、荒川の潺湲は次第に美しくなつて來た。しかし、餘り雜選してゐるので、それを子供達に指し示さうとしても、容易に顔を車窓から出すことが出来なかつた。

荒川の上流は、古生層なので、岩石が一種錆びた鼠色をなしてゐて、日光や木會あたりの花崗岩の上を流る、溪流の持つたやうな明るさを持つてゐなかつたけれども、それでも、そのぢみなカラアが一種落附いた感じを人に與へた。

やがて寶登山驛についた私達は、寶登山の大祭の賑やかな氣勢を後にして、溪に臨んだ長生館の奥の二階の一間におそくなつた午飯を食つた。

しかし、長瀬の眺めは、汽車が出來て、都會の人々が多く入り込むやうになつてから、非常にその最初持つたラスチックな靜かな氣分を失つたのを私は感じた。あたりもいやにひらけ、わるく乾いて、以前に書生時分に行つた時のやうなすぐれた印象を得ることが出来なかつた。

しかし、子供達には、その大きな岩が、またはその深い潭が、遊ぶには

めづらしく面白く感じられたやうに見えた。かれ等は岸から岸にわたした鍵の舟渡しを面白がつて、それを手繰つて二度も三度も對岸にわたつて見たりしてゐた。私はそれを樓上から眺めた。

寶登山神社では、花火の揚る音が頻りにして、午後に行つて見ると、田舎の大きな社の祭禮らしい氣分が名残なくあたりに漲りわたつてゐた。林の疎らな丘の中段には、寄進花火の筒が何本となく並べられてあつて、大きな黄い白い幣帛を振りながら、やがて打揚げらるべき花火の種類の名を人々は叫んだ。つゞいて花火は勇しく揚つた。

古 驛

輕井澤から御代田までの中仙道ほど荒廢して世に顧みられぬ道路はあるまい。其間に沓掛追分の二古驛がさびしい板葺の屋並を見せて居るばかり、風情ある松並木の影も無く、白壁を夕日に曬らせる村落もなく、一方は荒涼極りなき淺間のあら山、一方は褐色の佗しい丘と谷との連続、千曲の谿谷は前に展開して、其傍を縫うて駛る汽車の白い烟——三間幅の廣い道には、幾年前に通つたかと思はれる車の轍が太く痕跡を曳いて、其上に夥しく繁茂した雜草は早くも山の烈しい霜に打たれて枯れ盡して居た。

御代田の停車場から追分の古驛へ二里、やゝ爪尖上りで、燒石燒土のざくざくと歩き難い。赤松の根の蜿蜒、落葉松の黄葉せる樹立、をりく急瀬を漲らすべき空しき谿谷には、低い欄干の板橋が懸つて、大石小石の間を形ばかりの潺湲たる小流が微かな音を立て、居る。十二月に入つてから、

稀な暖かいある日の午後、一臺のほろ馬車は珍らしく此の板橋をとろろに鳴して追分へと向つた。

田舎の純粹のガタ馬車で、御者は此處等界限でよく見懸ける五十面の鬚男、路の悪いのも腕力で押通すといふ意氣込で、頻りに瘦馬の裸な毛のすり切れに背に鞭た加へるので、車は大波を乗切る船のやうに凄しく右に左に動揺した。其度毎に乗客は煽られて、狼狽て、柱を堅く握る、膝と膝とが相觸れる、隣の人の頭と危なくぶつかりさうになる。續いて互に顧みて笑ふ氣勢がする。乗客は五人、一人は土地の豪農の若主人、一人は上田あたりの私立中學校に教鞭を執る五十位の老理學士、一人は詩人、一人は雑誌記者、今一人は田舎に珍らしいハイカラな美しい庇髪であつた。此五人は昨夜豪農の家に泊つて、文學上の話やら、世間の雑話やらに夜更けるの

も知らなかつたのであるが、詩人と雑誌記者との東京に歸るのを他の三人が御代田の停車場まで送つて来て、其處で東西に別れる筈であつたのだ。昨夜、追分の古驛の話が出た。有名な油屋は豪農の家の遠い親戚に當る。何うです一つ追分を見に行かうではありませんか。衰頹と荒廢との古驛、其處に味ふべき趣味は澤山ある。かう言つて詩人は一行を誘つた。豪農の若主人は喜んで其案内者たらんことを誓うた。けれど一行が御代田に来て、汽車の發車時間に猶二時間の餘裕を見なかつたなら——この二時間以内に充分に追分に往つて來ることが出来るとの御者の證言を得なかつたならば、岩村田臼田行の馬車一臺、この五人の客を乗せて、反對に、通行の無い、路の悪い街道を駛らなかつたに相違ない。

豪農の若主人は、白い西洋皿を膝の上に置いて、馬車に烈しく揺られな

がら、漸く切斷した鐘詰から葡萄ジャミの紫色したのを無造作にそれへあけて、傍の風呂敷から手製の丸い麴包を幾個となく出して、そして一行に勧めた。

「實に興味がありますね」

と詩人は一つ取つた麴包にジャミをつけながら笑つて言つた。

「一寸、かういふのがモウバツサンの短篇集にあつたやうでしたね、古驛ぢやないが、色々な人がガタ馬車に乗つて、いろ／＼な話をして行くといふ話が——」

雑誌記者はかう言つた。

「さうでしたかね」と詩人は受けて、「兎に角面白いですな。一度榮えて、衰へて、今は全く敗滅に近い古驛と、其驛での有名な古屋とを、かうし

て馬車を買切つて、麴包に葡萄ジャミをつけて食つてわざ／＼見物に行くと言ふのは——」

「追分の油屋と謂へば、元は大した者です。私などまだ覚えてますが、旅人宿で居て、そして其中に女郎屋がある。二階に張店がちゃんと出来て居て、女郎が絶えず二十人位、居たでせう……」かう老理學士が話した「私が越後から出る時分には、追分はまだ盛なものでしたからナ。馬、馬車、朝の賑かさなどはそれは大したものだ。だから、維新前はそれは盛なものだつたらう。何でも幕府時代に油屋で雇人を二百五十人も遣つて居ると言ふので、其禁制が出た位ですからナ」

「兎に角大きかつたものです」と豪農の若主人が口を挿れた。「僕の祖父などからよく聞きました。毎夜百組位の泊り客があつた相ですから」

「家屋はすつかり元の儘ですか」

「え、元の儘です。來年になると、其一部を崩して輕井澤に持つて行くつて言つて居ましたが、まだ其儘にしてあるでせう。今ぢやとても掃除など出來はしませんから、荒れるまゝに放つて置くのです」

「追分はとても開く譯には行かんのですか、養蠶とか何とか適當な職業を與へて、恢復させることは出來ないのでですか」

かう訊いたのは雑誌記者である。

「駄目です。淺間の灰で桑は出來ず、氣候は寒し、作物は一切駄目、菜見たやうなものでさへ碌々出來るいのですから、……全然封建時代の交通の必要の上に榮えた街ですから、今後は自滅するより他に仕方ありません。五六年も経つと、全く滅びて了ふでせう」

「左様ですかナ」

「今でももう幾軒も残つては居りやしません。家が潰れ、ば潰れた切、建つことが無いですから……それに、かういふ荒地で、宿驛の他に、附近に村落が發達してないから駄目です」

荒涼たる落葉樹の間を馬車は烈しく動きながら駛つた。

「君さん、何うです今一つ」と若主人は葡萄ジャミの皿を一隅に小さくなつて居る娘の前に出した。白い顔、表情に富んだ眼、瘦削な細そりとした品の好い姿勢、紬の綿入に大島の羽織を着て、黒い髪には無造作に白いリボンが挿されてあつた。年は二十一、もう無邪氣な處女時代はとうに過ぎ去つて、新しい詩歌に讀耽つた身の田舎の主婦には餘りにハイカラに過ぎるといふ風、獨棲の淋しい色はつゝ、まじやかな眉目の間にも何處となく顯

はれて居た。詩人が上田の女學校に教鞭を執つて居た頃の門生で、今度東京から遊びにお出になつたと聞いて、慇々先生に逢ひに来たのだ。豪農の若主人の妻君の従妹に當つて居た。

若主人に勧められて、

「私、もう澤山」

と言つて莞爾笑つた。

「君子さん」と詩人は娘の方を見て、「僕等の悪い趣味のおつき合で、さぞ迷惑でせうね」

「あら、先生」と言つて、娘は低頭した。其言葉の調子には、「迷惑どころか、面白いですわ」といふ意味が籠められてあつた。

誰も澤山だと謂ふので、若主人は葡萄ジャミの残つた皿に麴包を五箇ほ

ど入れて、前に居る御者に與へた。御者は喜んで、麵包を嚙りながら、長い鞭を馬背に加へた。馬車は跳るやうにして進んで行く。

後にはすぐれた一場の風景がバナラマのやうに展けられて居た。うねうねと屈曲した路、根の上つた赤松の群、榛、榎などの雑木の林、落葉松の黄葉した丘、空しい谷は谷を孕んで、丘から丘へ續く褐色と鼠色の佗しい木立、處々に家屋が見えて、白壁が光つて、小春の暖かい日の光線が一種の厚さをのどかさを持つて居た。無數の谷と無數の丘から出來た千曲の谿谷には、今し其暖かい日が半分ほど照つて、谿流の南から北、北から西へ流れるさまがそれと指さされた。蓼科山の半腹あたりに鼠色の雲が懸つて、八ヶ嶽の偉大なる山容もやがてそれに包まれやうとして居た。でも、

南佐久の平野は美しく日に榮えて、岩村田町の簇々たる人家から南に駛つた甲州街道が髪かみのやうに分明見える。牧馬を以て聞えた野邊山の原も遠くそれと打渡される。一三日來俄かに寒くなつた初冬の時を急に取返したやうな暖かさで、空氣は澄んで冴えては居るが、何となく暢氣で春のやうだ。左は淺間の長い灰色の裾が一木の緑一草の紅をすら着けずに、大きく北から南に下つて、其中央に烏帽子嶽が濃く黒く其頭を顯はして居る。荒廢した大道の兩側には、今迄松と楢と榛とが疎らに點綴されてあつたが、やがて左側は焼石焼土の荒涼たる高原になつて了つて、萱、薄のがさぐくと風に鳴る絶間に、荆棘が赤い赤い實を葉の落ちた後の枝に鈴生に實らせて居た。右側には丈の低い松樹と落葉松とが縷かに續いて、其下草には篠と萱とが寒い風に吹かれて居た。

凡そ高原性の特色は此一曬の下に残りなく展けられた。荒涼と雄大と寂寞とを混ぜた一種の氣が到る處に満ちた。封建時代、中仙道の道路の榮えた頃にも、此荒涼たる光景は今と異なる處はなかつたらう。火山の烟の下に横はれる此天然の寂寥は、文明の力を以てしても如何ともすることが出来ぬのである。

一行は此背景の天然の美を飽くまでも指して語り合つた。詩人の胸には寂寥の情のこもつた美しい琴が彈ぜられた。雜誌記者の胸には都會の塵埃をかけ離れた清いやさしい情緒が燃えた。若い美しい娘の胸には——獨棲のさびし味と詩歌に對するあこがれの情とが烈しい力を以て壓して來た。老理學士は半ば白頭なる頭を柱に寄せて、自己の三十年來の轉軻不遇と、榮達せる舊友の身の上と、不愉快なる自己の家庭生活とを思ひ遣つた。これ

に産期近き若い妻君の上を氣遣へる若主人——さまざまの思ひを載せた馬車は、この美しい天然を背景にして、次第に敗滅に瀕した古驛にと近いて行つた。

褐色の道路の向ふに、板葺の家屋が見えて來た。馬は凹凸極りない阪路を喘いで、漸く平坦なる滑かな地に達したので、御者の鞭の加はるを待たずに、一散に驅出した。で、馬車の轟が一時靜かなさびしい古驛の空氣に響き渡つた。

驛に入らうとして、一行は前に大いなる立石の影を長く夕日に曳いて居るのを見た。路はそこで二つに分れて北と西とに向つて居る。所謂北陸街道と中仙道との追分である。郎は北に妾に西に、楊柳の影こそ今は無いが

百年、二百年、三百年、旅客の別離の涙は限りなく此處に注がれたのである。早發の客の編笠の上に残月の寒い影も宿つたであらうし、紅涙一夕の歡にあくがれて、後髪引かる、思ひに、顧み勝ちに旅に上つたものもあるであらう。情は幾度か燃え、幾度か消えた。人は幾度か逝き幾度か生れた。世は幾度か變り幾度か移つた。今や敗滅に近い古驛に猶この往昔の立石が長く影を夕日に曳いて居ると思ふと、一行の者は皆な一種の思に撲れた。

板葺が板葺と續いた。暫くの間は片側町である。家が潰えても礎だけは残つて居て、其間に萎ひた菜の青い畑が見える。眞土を焼土の上に運んで辛うして植付けた桑の樹の細くいぢけたのが眼に入る。並んだ家屋は孰れも時の力に黒く煤けて、壁の破れ、檐木の曲り、礎のぐらつき、一つとして満足なのは無い。二階家の窓は釘付けにされたかのやうに堅く閉ぢられ、

平家の障子は黒くくすほつて、中を覗くと、天井も羽目板も皆闇の夜の如く暗い。そして其處に住んで居る民は丸で窖の中に日の目も見ずに生活してゐるやうで、馬車のめづらしい轟を聞附けて出て來た子供の顔にも、何處となく敗滅の影が見える。

それでも二階の軒に細くしなひた大根を繩に編んで吊して置いた家があった。大根の葉を並べて懸けた繩の上に日影が佗しく赤く照つて居た。思ひ切つて舊式な郵便箱がとある家の軒に懸つて居た。雪が深く、風が烈しいので、家屋の構造はすべて山國造で、庇が長く深い。髪を逢々とさせた四十女が一人、喪心したやうな顔をして、とある家の前に立つて、じつと、馬車の通るのを見て居た。

馬車は此の衰頹の氣の滿ち渡つた驛の中央を靜かに輾つて、やがて大き

な構の家屋の前に留つた。

大なる構造！ 實際こんな家屋は東京にもあるまい。街道に臨んで立つた大きな二階屋の柱の太いのと、間口の廣いのと、庇の高いのと、それだけでも驚かるゝのに、まして堅固な大きな其構！ 音に聞えた追分驛の油屋とは是である。

二十間ほどの廣い間口、其處に一枚一間つゝの大和障子がすらりと閉められてあつて、昔は二階に懸けてあつたらしい大きい「あぶら屋」の看板が下に置かれてあつた。

馬車から下りた一行ををりから吹出した夕風が寒く掠めた。豪農の若主人は先づ其の重い大和障子を明けて中に入つた。ガタ馬車、馬、御者、洋服姿、和服姿、白いリボン、この古驛の街頭に、稍少時面白い光景を描い

て居た。

少時して、若主人は出て来た。一行は家の中に導かれた。百坪もあらうと思はれる広い板の間、見上げるやうな高い天井、幅の広い階段の広い、大きな階梯、見るから驚かされぬものはあるまい。其板の間の右を狭く小さく仕切つて、低く天井を造つて、四方に硝子障子をはめた八疊と六疊との二間、これが此の大きな家の家族の住居である。

「まア、皆様、よく……何うぞ此方へ」といふ聲がする。

「何うもね、御覽に入れたツて。こんな汚なくなつて居て、……掃除なんぞ出来やしませんから、本當に仕様がありませんよ。昔ならね、見て戴き度いのですけれども……」と土地に似合はぬ流暢なる東京辯、室の中では

豪農の若主人が、此家の六十一二の先代の老婦に熱心に話し懸けられて居るのだ。『眞さん、お子さんも皆御丈夫ですかね、結構ですな。宅の政吉も軽井澤の店の方に行つて居まして、減多には戻つて参りません。新太郎(主人)も今朝出て、もう歸らうと思ふんですけれど……』四人がぞろ／＼と其處に立つて居るのを見て、『よく、まア、皆様、こんなところに……まア、何うぞ此方にお入んなさいまし、……本當にね、昔ですと、この追分も賑かだ御座いましたけれど、もうかうなりましたは、何うにも致しやうが御座いませんで、穴の中に暮して居るやうで御座います』と、江戸産れの御世辭上手は、此歳になつても少しも變らない。

新しい御宅拜見なら解つて居るが、衰へて、古びて、傾いて、廢滅に近い家屋を見に来たとは、餘りに物好で、何だか話の調子が合はない。四人

の胸には確かに此の調子の好い老婦の言葉を聞きながら、一種異様の感を起した。小さく仕切つた二間には、それでも温い新しい氣が満ちわたつて、傍の圍爐裏に掛けた湯釜からは、白い湯氣が沸つて、勢よく登つて居た。老婦は人懐かしげに猶語りながら、其湯釜から竹製の小柄杓で湯を酌んで茶を煎れて出した。追分の昔、賑かであつた昔、此の廣い板の間に大小名の槍やら荷物やらが一杯に並んだ昔か詩人の胸にも雜誌記者の胸にも眼にも見る様に分明と浮んだ。そして續いて、此江戸産れの主婦の若かつた時の姿、賑かに榮えて暮した當時のさまなどを思ひ出して、今のこの八疊と六疊とに仕切つた淋しい暗い生活に比べて見た。けれど主婦には其昔が既に餘りに遠かつた。胸は其の榮華の追懐に殆んど倦んで、をりく／＼思起しても何等の反響をも起さなかつた。

「本當にお耻しいやうですけれど……」
 と言つて、老婦が案内に立つた。下婢が朝裏草履を四足、冷飯草履を一足持つて来て、客の前に並べた。

「朝裏が今一足ありさうなもんだがね」と老婦が氣にして言ふと、

「生憎御座いませんで」

「いゝえ、これで結構です」

と詩人が先に立つて冷飯草履を穿いた。

幅の廣い高い階梯にも既に塵埃が一杯で、歩々草履の跡を白く印した。階梯を上り盡すと、無数の室が或は六疊、或は十疊、或は八疊と刻んで連つてあつて、畳は揚げたまゝの古い根太板の處々は破れて、壁も到る處崩れ懸けて、中には三尺の壁が小前ばかりになつて透いて向ふが見える處な

どもあつた。塵埃の香と言ふものは、厭に人の神経を刺激するものだが、それが夥しく四邊に充ち渡つて居た。兩側に連る無數の室の中央に廊下が長く續いて居るが、雨戸が處々しか明けて無いので、何となく薄暗く物凄^{ものぢ}い。丁度化物屋敷か何かのやうで、暗い室毎に恐ろしい主でも居はせぬかと疑はれる。先に立つた老婦の草履を引摺^{ひきず}る音が陰に籠つて四邊に響く。がた／＼と天井で鼠の騒ぐ聲がする。何だか不愉快な物の滅するやうな氣が一面に行きわたつて、をり／＼明いた雨戸の光線に照される老婦の顔は、階下で見た快活なさまとは丸で違つて、蒼い物凄^{ものぢ}い陰氣な輪廓^{りんかく}を浮かせて居るやうに雜誌記者は思つた。ハイカラな美しい娘の顔にも不安な色が何處となく上つた。

廊下^{ろうか}を突當つて左に曲る。前の開放いた雨戸から光線が流るゝやうに射

し込んで、一とこ非常に明るい。前格子になつた長い室が連り渡る。珍らしく障子があるので、明けて見るとこんな處にも晝の間は人が住んで居ると見えて、小さい机が置かれてある。書籍が二三冊散ばつて居る。若主人が老婦に聞くと近所の若者に晝の中だけ貸間をして居るとの話。

老理學士が詩人に耳語した。

「此處が左様ですよ、此處が張見世^{はりみせ}のあつた處です」

「此處が……」と、詩人は立留つて仔細に見た。

かれの眼にも、雜誌記者の眼にも、今しも此細長い格子^{かかし}の中に、美しく、着飾つた女郎衆^{ぢやうしゆう}のすらりと並んださまが、歴々と浮んだ。と、旅客の群が幾人となく草履^{ひきず}を引摺つて、此格子戸の前に來て、喧噪^{がやう}と仇口を聞合ふさまが眼に映る。西鶴^{さいかく}の世之助も二十八歳の時に此處に來た。そして「追分

といふ所に遊女と名づけて、色の淺黒きを磨き、木賊伐る山家者の胼胝をなほさせ」と書いて置いた。色の世の中もかうなつてはもうお終だ。

時の力といふことが今更のやうに深く強く人々の胸を襲つた。

最も動かされたのは、老理學士であつた。轆轤三十年、同僚は皆榮達した。今の外務大臣は其校友である。自分より成績の悪かつた某々は理學博士、法學博士、文學博士となつた。であるのに自分ばかりはかくの如く飄零落魄して、公立の中學校にも居られず、山の中の私塾に来て、専門でも無い博物學や、漢學までをも子供に教へて、すきな酒も碌々飲めず、不愉快な家庭に日を送つて居ると思ふと情けなくなつた。其後悔慚愧の念よりも、故郷の越後から東京に往復した當時のことが一層明かに其胸に上つた。彼れも此格子に凭つて、美しい欄檻の姿に憧れた一人である。けれど其頃

の追憶は既に餘りに遠かつた。信濃に来て追分驛のことを考えることがあつても、會て一度もそれを思出した例は無かつた。が、今……現在眼に其格子の中の長い室を見、一夜を楽しく過した室が、かうして敗滅に近いであはれに残つて居るのを見ては、長い複雑した三十年の月日を一直線に直ちに其昔を眼前に歷々と浮べない譯には行かなかつた。

かれは立盡した。若主人に「先生、何うしました？」といはれる迄われを忘れて立盡して居た。

急に我に返つて、「昔のことを考へると、變な氣になりました。此室に寝たんですからナ！」

「此室に、……」

「え、現に、此室に、」

「春夢揚州三十年ですナ。思ひ出に堪へんといふ譯ですナ」と、傍に居た雑誌記者が笑つて言つた。詩人も若主人も共に笑つた。老理學士も佗しい追憶から離れて、同じく聲高く笑つた。娘ばかりは蒼白い顔をして居た。一行は廊下を廻盡した。他の階梯を階下へと降りた。檜の柵の板を張つた立派な廁が通路にあつた。手洗の石の鉢には何處から吹飛ばされて來たか、檜の葉が一杯に詰つて居た。棟から棟へ通ずる廊下は、雨風の吹晒すに任せてあるので、節なしの檜の板がしたゝか腐つて、注意をしないと、落ちるばかりになつて居る。廊下の傍に白壁の土藏があつて、戸前の壁が半分ほど自然に崩れて落ちて居た。軒の板屋根も今まさに墜落しさうになつて居るのを、長い庇が辛うじて支へて居た。到る處自然の偉大なる力に對して人間の敗滅を語らねばない。敗滅！ 然り、悲しむべき人間の敗滅！

以前の住居に近い處に一行は戻つて來た。

二間、三間、光線の明るい室が連つて居た。疊も新しく、長押には名家の書の額も懸けてあつた。今でもどうかすると、淺間登山の書生や、好奇の避暑の客などの來て泊ることがあるといふ。其處からは小さい丘と谷との起伏が見えて、夕陽が美しく野を彩つた。下りの四時半の汽車が白い煙を空しい林の間に立て、駛つて行くのが玩具のやうに小さく見えた。娘は此處に來て、始めてほつと不安の胸を撫で下した。

歸途を促す馬車の喇叭の音が今しも古驛の街頭に響き渡つた。

日光と鹽原

新緑の美しさ——それは芭蕉の「あらたうと青葉若葉の日の光り」を思ひ出させずには置かないやうな美しさであつた。あらゆる萌え出づる力に伴れて、次第に塗られて来るさまざまの色彩、それが山を蔽ひ、谷を蔽ひ、朱塗の典雅な橋を蔽ひ、更にキラキラと溪の瀬に碎ける日影と相掩映して、暗い杉の森の中に半ば埋められたやうになつてゐるあの金碧の殿堂も、其頃には、晴れやかに世間にあらはれ出してゐるやうな気がした。外山の半

腹あたりから望むと、その杉の古樹を新緑と相雜り合つた間に、或はその屋尖を、或はその樓閣を、或はその五重塔を、或はその廻廊をさながら大和繪か何ぞのやうに展開して見せた。單に繪だとか何とか言つて了ふことの出来ないやうな美しさが其處にあつた。私はよく獨りでその金碧の殿堂を繞つた苔の深い石垣に添つた路を歩いたが、をりをりは崖になつたところに卯の花などが眞白に咲いてゐて、それがある日には、ちらちらとそこを流るゝ細い綺麗な溪水の上に落ちた。

六月の祭禮は殊に私の心を惹いた。祖先の昔からそれと定められた神領の百姓達は、今も其日は朝早くからやつて来て、三神庫の中に藏められた鎧兜槍、刀等に身をかため、或は鎧武者となり、或は槍持となり、或は太刀持となり、古い昔のまゝの列をつくつて、東照宮のある門前から長

阪の旅所へと神輿に扈從しつつ進んだ。尠くとも私はそこに日本にもさう澤山には見ることの出来ない古風な祭禮の儀式を発見した。長阪の旅所のひろい庭では、冠をつけた神官達が、悠揚迫らざる笙や、箏の調子につれて、昔の東遊びの舞踊を舞ひ、僧は僧で、その山特有の一種古雅な調子の足取りで、その大きなひろい裾を翻して見せた。

その旅所の廣庭——それは平生は全く人氣なく暗く閉ざれてあるのであつたが、その日ばかりは晴れやかに、さながら遠い昔のある一日が俄かに再びそこに蘇つて來たかのやうに、今の世とは全く異つた色彩と氣分とをあたりに漂はせた。白い裾の長い衣服、冠の高く欹つた人達の姿、笙の音の靜かな調子、もし其處に、それを見物する群集の中に、眞紅のバラソルを翳した肥つた外國婦人が雜つてなかつたならば、私達の心は、遠く千年

の昔の世に夢のやうに誘はれて行つて了つたに相違なかつた。

二

「今日は風呂を立てさせました。不斷閉めて置くので、本當に風呂だけで、お茶も碌々あけることは出来ませんが、何うです、いらつしやいませんか。」かう言つて、私はG院の主僧から誘はれたことがあつた。

夏は明けて外國人などに貸すが、平生は全く閉め切つて、唯、番人が一人隅に小さくなつてゐるばかり、主僧も一山の内に、その他に輪番の持場持場があるので、自分の寺に歸つて住むやうなことは滅多にはないのであつた。唯、月に二度か三度、留守居のものに命じて、戸の一部を明けさせ、風呂を立てさせ、そこで一二時間を靜かに過した。

私は日が暮れてから出かけた。

G院の主僧は、同僚の人達と暮などをうつてゐた。

「よくいらつしやいました」

かう言つてG院は立つた來た。

風呂場——それは綺麗な理想的な風呂場であつた。水は小さな溜のやうに樋からすさまじく流れ落ちた。それに口を當てると、その冷めたさは齒に沁みわたるやうであつた。私はさびしい僧達の生活を想像しつゝ靜かに湯に浸つた。

何處に行つても、この綺麗な水は羨しかつた。それだけでも、都會に住む私達に取つては、既に大きな御馳走のやうな氣がした。風呂に、酒に、蕎麥に、とろゝ汁に、精進揚に——さうした生活もまた私達には、羨しか

つた。女のない生活、淋しいけれどもわづらひのない生活。

しかし、僧達にはかうした生活は矢張物足りないらしかつた。G院は私に廣い室々を案内して見せて、「すべて理想的です、唯、一つ不足がありません。他でもない。それは明眸皓齒」こんなことを言つて笑つたりした。

同じやうに並んだ五六の寺坊——その寺坊では何處の室からも、地を撼すやうな深く穿たれた溪谷の水聲がきこえて來た。朝に、夕に、靜かな午後、または夜更けてひとり目覺めた枕のほとりに……。或は低く、或は高く、或は驟雨のやうに、或は珊々と佩玉を鳴すかのやうに。

私は夜ふけてよくひとり目を覺してゐるやうなことが多かつた。雨戸をも引かないに廊下の障子には、明るい月の光がさし込んで、慈悲心鳥がキ、キ、キと空を掠めて鳴いて通つた。ある夜は、曉近く凄しく山風が吹

き起つて、樹といふ樹は軌り、枝といふ枝は撓ひ、葉といふ葉は鳴つて、いつもきこえる水聲さへも、全くそれに没却されて了つたことがあつた。日光の山の氣象の烈しさに私はその時初めて觸れたやうな氣がした。

私はよくあの神橋から入町の方へ行く川そひの路を散歩した。高くそり立つやうに聳えてゐる對岸の山巒、その裾を迂餘曲折して或は右に、或は左に、或は左右相合して落ちて流れて來る溪水の様は、私の心を樂ましめるに十分であつた。

ある夕暮には、怒號憤越して流れるその溪水の上に、一面に白い霧がかかつたりした。この溪には青い美しい海苔が出來た。しかし、鮎は此處まで上つて來なかつた。澤山の雪解の水を雜せた溪水は、餘りかれ等にはつめたすぎた。

三

其處は日光のすべての山水の鎖鑰を成してゐると言はれてゐるだけであつて、朱塗の橋のほとりはいくら世間に俗化されても、容易に俗化され切つて了はないやうなところがあつた。町を出てほつと呼吸がつかれるやうなその溪谷、橋の前面にそそり立つやうに聳えてゐる山の姿、雨などにはこ
とに、その橋の朱の色が鮮かに美しくかゝやいて見えた。

含滿ヶ淵は、今は荒れたけれど、それでも猶ほ行つて見る價値は十分にあつた。田母澤の上流にかゝつてゐる寂光の七瀑、その奥にある相生の瀑、世人は餘り知らないけれど、秋の紅葉の時には、捨て難い趣があつた。

裏見瀑に赴く途中の高原は、春はのがであつた。駒鳥などが頻りに嘯り、岩躑躅がそこそこ、に點綴せられ、遠くきこえる荒澤の谷の水の音は、「山行二三里。漸聞水聲。」といふ感じを私に與へた。

裏見瀑の美は、瀑そのものよりも、その附近の山の姿、谷の眺め、または溪流の變化の面白さにあつた。日光の山巒の中に藏せられた神祕な氣分、それが此處に一とこ開けて世間に落ちてゐるやうな氣がした。それと言ふのも、此處から裏山の山麓に入つて行く山路が一路遙かに栗山の深山窮谷へと通じて行つてゐるためであらう。こゝから富士見峠へ三里、志津の小屋へ三里。

初音の瀧、その上流の慈觀の瀑、こゝらあたりまで、遊覽の客も入つて行つて見る必要があらうと思ふ。

電車が出來て、あのあたりはかなりに開けたけれど、それでも、蔦屋の古い旅舎のある馬返しは、いかにも山口の里らしい感じを旅客に與へるに十分であつた。その旅舎の庭の小さな池に映つたさつきの色、また秋の紅葉、林を透して、溪水の轟きわたつて來るさまは、何うしても、日光の烈しい山の氣象を人々に思はせずには置かない。それから入つて行く一歩一歩、あの深澤の深潭からかけて、般若、方等二瀑の瀉下した大きな溪谷を經て來た谷や水流を遙かに下に見下ろすやうな位置になつてゐる中の茶屋一縷綫のごとき阿含の瀧、二十四重の峻阪をのほりつくした太平の白樺の林やがて華嚴の瀑聲のきこえて來るあたりは、日光の山水の繪卷の中で殊に最もすぐれたシーンとしなければならなかつた。

日光の山水は、單に溪山として見れば、或は鹽原の溪谷に劣るかも知れ

なかつた。しかし、鹽原にないものを、日光は非常に多く持つてゐた。あの明媚な湖水、あの世離れた菖蒲ヶ濱、つゞいてあの戰場ヶ原の静けさ――

湖水を横ぎる舟もまた興味が多かつた。普通は菖蒲ヶ濱まで舟を備つてわたつて行くにすぎないけれども、それだけでも、都會の人達の容易に得ることの出来ない楽しみを盡すことが出来た。舟から見た四圍の山巒は、さながら萬花鏡中の影に埋められるやうな心持を旅客に誘つた。山と水、水と山、それに雲の絶えざる浮動が加つて、全く身は紅塵の外に漂つたやうな氣がした。

四

「オウ――」

「オウ。」

深い深い霧の中で、かう霧が淋しく反響した。それは六月の初旬であつた。山奥のまだ家を開いたばかりの湯泉場は、しんとして、何の物音もきこえなかつた。霧は流るゝやうに、または巴渦を巻くやうにして家々の底を深く罩めた。

私は次第に、一間先も見えぬまでに、霧が深く罩めて來るのを見た。もう何も彼も見えなかつた。今まで微かながらに見えてゐた湖水も、湖水の岸に湯氣を白く靡かせてゐた小さな浴槽も、何も彼も………。

「オウ。」

「オウ――」

とまた反響した。

かうした山の霧、これは深山でなければとても見ることの出来ないものである。しかし、日光に於ては、この山奥の温泉場に限らず、中禪寺でも山内でも往々にしてこの濃霧に邂逅する。殊に六月、七月頃に多い。

山内である夜に邂逅した霧も、私には忘れかねた。夕飯をすまして外に出て見ると、深い深い霧である。唯、外の電燈の光がほつと光燦なく點いてるばかりで、杉の木立も、殿堂も、寺の屋根も、山の一角に何も彼も見えない。それに、風もいくらかあつたので、霧の流れるさまが早く早く私の眼の前を掠めた。

私は公園を通り抜けて、辛うじて入町に出たが、人聲はきこえながら、あたりは灯より他に何も見えなかつた。私は靜かに歩いて大谷の岸の方へ

と行つた。

日はまだ暮れたばかりなので、夕暮の光りはまだ何處か残つてゐるらしく、岸に来て見ると、水の瀬をなして流れてゐる上に、霧が破れては合ひ合つてはまた破るゝさまがそれとさやかに指さゝれた。水聲に破られて霧が瀬と共に流れて下るさまは、めづらしい眺めを私に與へた。

私はじつと立盡した。

深く封じた霧は、山より吹おろす風につれて、時の間にまた破れて行つた。次第に、谷をめぐる峯の尖や、山の髻や、また嶺の上に聳えた松や、黒い大きな山の肩などがあらはれ出して來た。霧は早く早く流れた。

鹽原の谷は、始めて訪ねて行つたものを驚かさずには置かなかつた。單に溪谷としては、日光の大谷の谷もこれに及ばず、箱根の早川の谷もまたこれに及ばず、木曾の峽谷もまたこれに及ばず、耶馬の溪もまたこれに及ばず、玖摩、富士、天龍——それは舟楫を通ずると通ぜざるとの別はあるにしても、矢張この鹽原の箒川の谷には及ぶべしとも思はれなかつた。

第一、谷の深いのが好い。兩岸の相仄して迫つた形が好い。次に、溪が幾重にも纒の如く曲り曲つて、次第にその奇をあらはして來るのが好い。俯しても容易に見ることの出來ないあたりに、水聲が微かに咽んで、樹木の緑の漲つた底に、纒かに深潭の鬚髯を認め得る形も、旅客の心を惹くに十分であつた。迫つた幅の狭い谷、脚下に深く穿たれた谷、樹木の深緑に半は埋れた谷、折れ曲るにつれて次第にその奇をあらはして來る谷、さう

した谷は、この箒川の谷に於て、最もすぐれたものを見出したと言つても、決してそれは過言ではなかつた。

その他に、何處に私はかうした溪谷を發見するであらうか。私はあれかこれかと思ひめぐらして見た。甲斐の御嶽の谷を其處に持つて來て比較して見た。耶馬溪の谷を其處に持つて來て比較して見た。しかし、いづれもこの箒川の谷に比肩すべきものはなかつた。

しかし、私はこの溪谷にあくがる、心は、決して今の開けた、繁華になつた、山下まで軌道の通じた、自動車の通つて行く溪谷ではなかつた。私はこゝからあらゆる文化の外皮を取除きたいと思つた。交通の便すらも却つてない方が好いと思つた。私はこの鹽原の谷の百年以前を想像した。

その頃には、この山水は更に一層の美を持つてゐたに相違なかつた。あ

の小さな幾つかの瀑を持つた坦々とした道などはなくて、旅客は岨から岨へ、山から山へ猿のやうに渡つて行かなければならなかつたに相違なかつた。何でも、昔は、その迫つた峡谷の或は底に、或は崖に、或は岨に、縷のやうに路がついてゐて、湯治に行く人達はそこに入つて行つたといふことであつた。従つてその時分には、この美しい山水の眺めも、溪流の見事な瀬も、人の眼につくことなしに、全くこの萬山の中に埋れて了つてゐたに相違ないのであつた。私は大網の湯の白い湯氣のさびしく溪谷の中にあがつてゐる繪のやうなさまをも眼の前に描き出すことが出来た。

鹽の湯などに行くにも、三四十年前までには随分危険な思ひもしなければそこに行くことは出来なかつたといふ話であつた。私は自動車に俗化されずこんな御殿でもあるやうな温泉宿に俗化されず、わるく半可通にな

つた土地の人達に俗化されずに、人知れず深く山中にかくれてゐた頃の簾川の谷をなつかしきままにはゐられないやうな氣がした。

あの那須野を横断して、西那須野から新鹽原までつゞいてゐる軌道も、便利ではあるけれども、鹽原に旅行するものゝためにいろ／＼な興味を殺ぎつゝあることは事實であつた。單調ではあるが——また夏などは暑い道ではあるが、那須野を歩くといふことは、また那須野を乗合馬車で揺られて行くといふことは、決して興味の無いものではなかつたのであつた。廣漠とした原野の中を、一步一步涼しい美しい峡谷の中に入つて行くといふのも旅としては興味があつた。

常川の谷は、回願橋附近に至るまでが最もすぐれてゐる。大網温泉のあつたあたりも決してわるくない。しかし、溪に添うた路が、次第に溪に近く

益々溪と平行するやうな形になつて行くに従つて、奔瀨の奇、岩石の怪は多くこれを目に集めることが出来るけれども、しかも溪としての眺めは、漸く平凡になつて行くのを免かれなかつた。御用邸の附近の箒川は、溪谷としての美よりも、むしろ奔瀨としての奇を私は見た。

福渡戸は昔は静かでありどころであつたけれども、今はすつかり開けて、鹽原中の最も賑かな温泉場となつた。やゝ俗化しすぎて了つた。

六

天狗岩のあるあたりは、流石に絶景である。

溪橋が溪橋に接し、巨岩の水に聳えて相連つてゐるさまは、日光にも何處にも多くその比を見ることの出来ぬやうなものである。日光の深澤の溪

澤に比べては、孰れか兄、孰れが弟たるかを知らないと言つて差支ない。

私は鹽の湯に行つて四五日ゐたことがあつた。此處は鹽原の中でも、深く奥へ入り込んだゞけに、いかにも静かで、全く都會の紅塵を没却し去ることが出来るやうに思はれた。それは箒川の一支流の岸で、兩岸の相迫つた形は、福渡戸、門前あたりよりも、餘程趣致に富んでゐるのを私は見た。旅館などにも居心地の好い家が多かつた。

前に高く尖つた山巒、山の影と影とは互ひに深く交叉して、溪聲の鳴る音が常に高くあたりを反響してきこえた。そこから此處からも源流近い、溪が寄り集つて、或は小さな谷をつくり、瀨をつくり、瀑をつくつて、そして大きな箒川の谷へと落ちて行くやうなところであつた。

兄弟が瀧、小太郎淵などのある山の中は、鹽原の溪谷の中にも、最も深

い山の特色を持つてゐた。

しかし、初めて入つて行つて、非常にその山水に撲たれるには撲たれても、長くゐるにつれて、次第に退屈になつて来るのはこの鹽原の谷である。温泉が到るところに湧出してゐるのでそれからそれへと移つて行つて、それで退屈をまぎらせることは出来るけれど、何にしてもシインに變化がないのが遺憾であつた。此處では日光のやうに、高原の爽かさを見ることが出来ない。溪水の鮮やかさを求むることは出来ない。また瀑の美しさを見ることが出来ない。それに、山が迫つてゐるので、何處となく、鼻先がつかえて来さうな氣がして、何となく鬱陶しい。

その點から言ふと、温泉場としての價値は、到底、箱根の變化の多いのに及ぶことが出来ない。しかし、伊香保と比較して見れば、好き嫌ひから

言つて、私は鹽原の方が好いと思つた。

門前、古町、須卷、これ等の温泉場も皆好い。更に深く荒湯あたりまで入つて行けば、雲烟や、霧や、深い深い山の嵐氣なども益々味ふことが出来るに相違ない。更に奥深く路をたどつて、鬼怒川の岸に出て行くのも興味の多い旅の行程である。川治の湯から瀧の湯を経て、中岩橋、籠岩の方に出て来る路は、普通の遊覽者にはちよつと難かしいが、若い人達にはさう大した骨の折れる路ではなかつた。

私は東京に近く、好い温泉をきかれた時、一番先きに、先づ箱根と答へた。次ぎに鹽原と答へた。そしてその次ぎに伊香保と答へた。

「日光の奥の湯がせめて中禪寺の菖蒲ヶ濱あたりにも引いて来られるとそれこそ日光や中禪寺の繁華がぐつと違つた影を取つて来るんだが——」

熊野の山水

こんなことをも私はつけ加へた。

一

熊野には私は南伊勢から入つた。志摩の濱島から沿岸二三十里、何遍となく上つたり下つたりする徒崖を伊勢の長島まで来た時には、私は長い旅でも終へたやうにはつと呼吸をついた。(まあ、ここからは汽船が出る)かう思つて、古風な行燈などのついた大きな旅館の一間に安らかに眠つた。志摩から南伊勢の海岸、そこには五ヶ所だの、贅だの、錦浦だのといふ

海山の勝のすぐれたところがあつて、ある峠の上から御座岬を振返つて見た形などは、容易に他に得られないほどのすぐれた眺めを持つてゐたけれど、しかも交通の不便は、到底普通の遊覽者を其處に伴れて行くことは出来なかつた。草鞋穿きに絲經を着た私でさへ、長島まで出るのに、かなり辛い山路の經驗を嘗めさせられた。私は徒崖から徒崖を渉るやうに、または漁村から漁村へ越えるやうにしてその海岸を縫つて歩いた。時には美しい島があつたり、繪のやうな静かな入江があつたり、桃の花の見事に碧い海色に反映する丘があつたりする海岸を、または一帆の危く欹つやうな凄じい怒濤の經えず打寄せて来る海岸を。

『山こしに見えこそわたれ今宵わがやどる港の帆はしらの影』これは錦浦から日暮に峠を越えて長島に行つた時の實景實情であつた。(兎に角、長島

まで行けば、それから先は紀州街道である。陸地を歩いて行くにしても、今までのやうな邊僻なさびしい且つ不便な道路ではないに相違ない。それに、都合が好ければ、明日は、そこからこの沿海百里を航行する汽船に乗ることが出来る。かう思ふと眼下に展けられた港の夕暮のさまが、何とも言はれない旅情を私の胸に簇らせた。

長島の港頭には、小さな島が一つ二つ海中に聳えてゐて、その向ふに、南伊勢から紀州に連る山脈が障壁のやうにすうと長く連つてゐるのが見えた。あくる日の午前九時頃、汽笛の音に誘はれて急いで海岸に出て行つた私は、その右の方の島に近く、一隻の汽船が、さながら怒濤の中を突破して來た勇士のやうに、黒い煤烟をもくもくと海上に靡かせて碇泊してゐるのを認めた。で、私は解でその汽船へと行つて、終日その海岸を航行した。

尾鷲の海岸、木の本の海岸、汽船は岸を、岸をと縫ふやうにして進んだ。汽船が新宮の沖に達した時には、日は既に全く暮れつくしてゐた。

二

新宮は埠頭を持つてゐなかつた。それと言ふのも、熊野川の激しい流が常に泥沙をその河口に流すからで、その一里西方の三輪崎がその事実上の新宮の港をなしてゐるのであつた。私は三輪崎に一夜泊つて、あくる日は、雨を衝いて、那智山へと向つた。

紀州の雨は私に取つて忘れられないものであつた。黒潮の関係で、氣候は南國のやうに暖く、熱帯地方の植物なども往々にしてその海岸を彩つてゐるといふことであつたが、雨の多いのもまたその特色であるらしく、私

は三日三夜ぬれた旅の衣を干すことも出来ないやうな目に逢つた。しかし、伊勢、志摩あたりに比べると、氣候は一月近くも違つて、菜種の花は咲き蛙の聲はあたりに満ち、到るところ夏蜜柑の實は、既に黄く熟してゐるのを私は認めた。

今は、勝浦から新宮へと軌道が出来てゐるので、那智山に入つて行くにはわけはないが、その時分は、例の那智の黒石の多い海岸を二里程も歩いて、それから山に入つて行かなければならなかつた。

那智山は流行佛の所在地としては、かなりの賑はひを見せてゐる町であつた。しかし山そのものは、決して秀麗とか、典雅とか、または奇峭とか言ふ形容詞で形容するやうなものではなかつた。平凡であつた。深山といふ感じにも乏しかつた。従つて例の有名な瀑も、大きいには大きい、烈し

いとか、凄じいとかいふ瀑ではなかつた。瀑底近く行けば、それで、流石に飛沫が衣を沾すけれども、遠く望んだ感じは匹練の二字でこれを盡すことが出来るやうな気がした。

しかしこゝから大雲取、小雲取の険を踰えて、本宮まで行つて見ると、その間には非常にすぐれた、世の常でないシーンが澤山に澤山にあるといふことであつた。しかし、私はそこを踏えなかつた。私はすぐ那智山から引返して、新宮に来て泊つた。

新宮は特色のある町である。海近い町といふ感じよりも、寧ろ山の中の町といふやうな氣のする町である。熊野川を流して下す木材の新しい匂ひがどことなくあたりに満ちて、いかにも木材町らしい感じを嗅ぐやうな思を私にさせた。周囲をめぐつた丘陵も凡でなかつた。

あくる朝は、私は雨を犯して出かけた。新宮の祠にお詣りをして、それから少し行くと、もうやがて熊野川の岸である。小さな渡をわたつて、次第に私は雲烟の搖曳した山巒の中へと入つて行つた。

河口近いので、始めはさう大して興味を惹かなかつたが、一重二重と折れ曲つて入つて行くにつれて、次第に雲烟は渦上し、嵐氣は奔騰し、水聲は凄じく四境に反響するやうになつて行つた。急に水聲が高くなつたと思ふと、やがて思ひもかけない大きな瀧が鏗然として深潭に落下してゐるのを私は認めた。

益々兩岸の山巒は高く高くなつて、今は殆ど仰ぐばかりになつた。ところによつては、河床が思切つて高く、凄じく白龍の首をつらねて下るやうなところもあれば、兩岸が狭く迫つて、川原に添つた路も往々にして絶え

はしないかと思はれるやうなところもあつた。そして雨にぬれた岩石の間を箆笠をつけた筏師が竿を弓のやうに張つて、速く速く下つて行くのが見えた。

「いかにして種は生ひけんと思ふまで高き高根に花の咲くかな」かうした眺めもやがては私の前にあらはれて來た。

水の多い時には瀉下し、濁水の時には、單に赤く癩ぎてゐるやうな瀧のあとが到るところにあつた。現に、十五六丈の瀧の落ちてゐるものも三四條あるのを私は見落さなかつた。

三

熊野川の峽谷は玖摩川、富士川に比して、一層變化に富んでゐる。樹木

も多く、雲烟も多く、屈曲も多い。「大八州遊記」の作者が口をきはめて、賞めたのも決して無理ではない。

熊野川の美は主として本宮から二里ほど下つたあたりにあるが、北山川を容れてから少し下つたあたりも、また決してわるくはない。重り合つた山巒が険しく且高いので、舟で下つて行くと、何となく凄じく恐ろしいやうな気がした。

これに比べると、北山川は明るく且つ心持が好かつた。

「この渡しは何ッて言ひます？」

かう私は訊いた。

「四瀧―」

このあたりは、いかにも川がひろびろとしてゐた。山もやゝ開けてゐる。

「海八町には此方ですね」

「さうだ」

で、私は今まで沿うて歩いて來た熊野川に別れて、今度は靜かな、明るい北山川に添つて溯つて行つた。幸ひに雨は晴れて、ところどころ雲切れがした間から碧い碧い空が覗かれた。白いもくもくした綿のやうな雲が絶えず渦き上つた。

一里ほど來ると、路はまた険しくなつた。竹筒あたりでは、山巒の根が深く谷に向つて落ちて、北山川の流れは眼底に咽んで流れた。熊野川以上に屈曲の多い此川は、到る處に筏の集積地をつくつて、小さな村落が既に全く木材に満されてゐるのを私は認めた。

竹筒から山を一つ越して下ると、そこはもう玉置口であつた。私は玉置

川を徒渉して辛うじて其村に入ったが、漸く舟を出して呉れる家をその村にさがして、漸くその有名な瀨八町へと向ふことが出来た。

大きな艦を肩にした船頭は、私の前に立つて歩いた。

「船でなくつては、行つて見られないやうになつてゐるんだね？」

「え、さうです——」

「昔から、人はさうした岩のあるのを知つてゐたのかね？」

「土地のものは知つてやしたとも……。とろつて言ふのは、昔から言つてゐる名なんですよ」

「今は、人は来るかね」

「随分来まさ。一年中ぢや、大したもんだな……」

「矢張、秋が多いかね」

「夏が多いな——」

見ると、もうそこはその入口であつた。潺湲とした瀨、更にその先に、兩岸から更に重つた高い絶壁、水聲は私の胸に沁入るやうにきこえた。

私はそのまゝ、そこにある船に身を托した。

始めは棹で岸に添つて行つたが、暫くすると、船頭は棹を艦に代へて、頻りにそれを押し始めた。潺湲とした瀨は盡きて、やがて碧い碧い深潭が開けた。

岩石の奇もあるけれども、それよりも此の溪の特色は、沈々として聲なき深きその瀨潭にあつた。船はさゝやかな波紋をつくつて静かに進んだ。

「戒ほど好いところだ？」

私ははるばる海を渡り、山を踰えてやつて來た效があると思つた。

私はこれに似た溪をあれかこれかと想像して見た。第一に思ひ出されて来たのは、秩父の長瀬であつた。しかし彼はとても此には及ばなかつた。第一、境が及ばない。岩石が及ばない。深潭が及ばない……。つゞいて私は陸中の獅子ヶ鼻を思ひ出した。長瀬よりは寧ろこの方が形に於て似てゐた。しかし、かれには、決してかうした深山の幽邃な氣分を求めることは出来なかつた。岩石は或は彼、此に勝るものがあるかも知れないけれども、この水の深さ、淨さ、また碧さは、とても、かれ、これに及ぶべくもなかつた。『ふむ、好いところだ』かう私は獨語した。

溪潭はしんとしてゐる。何の音もきこえて來ない。唯、私の乗つてゐる船の體の音があたりに響いてきこえて來るばかりである。船頭は岸にある岩石の名を一つ一つ説明して私にきかせた。

溪潭はかなりに長かつた。此方の崖から彼方の絶壁まで、その長さは少くとも十町位はあつた。碧い深い靜かな潭！ 淺いところで三尋より淺くなく、深いところは七尋以上に達したこの潭！ 私は長い間人知れずこの深山の中に埋れた形を想像して、不思議な氣がした。

溪潭の盡きたところには、上流から流れて來た筏が一杯に満たされてあつた。私は溪の盡きたところにある小さな家にその夜は泊つた。

四

私は大塔宮の遺蹟を探りたかつたので、そこから直ちに玉置山に登つた。この間の山路は、全くの密林で、日本アルプスの中でも歩いてゐるやうな氣がした。『今だにもかくも峻しき山路をいかにか御子はたどりましけん』

かう私は手帳にかきつけた。片岡八郎の戦死した花折塚の前では「さぐべき花のなきこそうらみなれ君が御墓の前に來つれど」と私は詠んだ。護良親玉が十津川にも居られずに、かうした深山のなかまで遁れて來たかと思ふと、私は黯然として昔を思はずにはゐられなかつた。玉置山からは、私は萬山の中をたどつて、本宮へと下りた。

本宮は新宮に比べると、ぐつとさびしい。しかし熊野神社の祠は川に臨んでゐて、ちよつと感じが好い。こゝからは、新宮までの河船が毎日數回下つた。

湯の峯の温泉は熊野の山中に入つたものゝ是非一度は行つて見なければならぬところであつた。それは本宮から三十町ほどで、小さな峠を一つ越すと、すぐその下にあるのであるが、田舎としては、割合に居心地の好

い温泉場であつた。この近くに、曲川といふ川があつて、その上流にも、ちよつとした山水の勝がある。

この本宮から近露といふ、これも矢張護良親王が土地の豪族に追はれて僅かに身を以て免れたやうなところを通つて、逢阪峠、其他もう一つ何かいふ大きな峠を越して、栗栖川から田邊の海岸へと出て來る路がある。これは中邊地通りと言つて、昔は京畿地方から熊野に行くには、皆なその路を通つて行つたもので、潮見峠から振返つて海を眺めた眺望などは、その間の名勝として、昔から入口に膾炙してゐた。

しかし、今はこの路を歩くのは餘りに好奇にすぎる。それに、わざわざその長い峻しい路を突破しなければならぬほどの勝地もその間にない。それよりは、熊野に入つて行く陸路としては、吉野から十津川に入り、そ

の山中に一泊二泊して、本宮へと出て来る方が、便利でもあり、且つ面白くもあると思ふ。

あくる日は私は本宮から河舟に乗つて、昨日岸に添うて上つて来た熊野川を静かに下つて行つた。その日も矢張雨であつた。本宮を出る時分には殊にそれが烈しく、貰いた苦の一角をあけても、雨がサツと吹き込んで来た。これではとても溪山のすぐれた眺めを恣まゝにすることは出来ないかと私は思つて、尠なからず失望した。

川水も黄く濁つて、瀬はゴォゴォ音を立て、鳴つた。

しかし一里ほど下つた時分には、雨も小降りになつて、蝙蝠傘をさして苦の外に出てゐてもそれほど差支ない位になつた。山巒からは白い雲がもくもくと渦き上つた。

で、私は雨の苦舟の中にありながら、何うやら彼うやら熊野川の長い絵巻を見ることが出来た。次第に山や岩石があらはれ出した。ところどころに點々された躑躅や山吹の美しさも、雲霧の間からをりくゝあらはれる大きな瀑の姿も、何も彼も……。

雨後の水量は凄じく増して、時には危険ではないかと思はれるばかりに、崖やら絶壁やらに向つて、船は矢を射るごとく落ちて行つた。船頭は互ひに聲をかけて、前にそゝり立つた大きな岩石をぐるりと巧みに廻つて行つた。

鼎のやうに凄じく湧き立つた瀬は、次から次ぎへと来た。晴れた日ならば、水はさぞ美しいであらう。日影が美しく七彩を成してその底にさし込んでゐるのであらう。底の石も數へられるばかりにきらきらと輝いて流れ

るであらう。しかし、その日は溪水はすつかり濁つて、唯、黄い奔流が絶えず船を瀬の中に掀翻させるばかりであつた。時の間に船は北山川を併せるあたりまで下つて来た。

五

紀州の山水は、山が深いだけに、近畿地方とは思はれないやうな深さと美しさを持つてゐた。近畿の山嶺の中では、吉野の奥の大峯、大臺ヶ原、それ等を除いては、何うしても熊野の山嶺が一番深く且つ人家に遠かつた。深い深い密林も其處にはある。筏を伐りおろす山の絶壁もそこにはある。大きな道を山奥まで開いて、電気仕かけの製板所をつくつたやうなところもそこにはある。駒鳥のなくやうな深い谷もそこにはある。『紀の海の波よ

りも猶けはしきは熊野のおくの山路也けり』私はかうその時手帳にかきつけたが、實際、紀州をめぐる悪灘百餘里の怒濤にもまして容易に踏破し盡すことの出来ないのは、熊野の山嶺であつた。漣八町のやうな深い、嵐氣に富んだ、滅多に世間に俗了されて了はない山水があるのも無理はないと私は思つた。

海岸では、木の本の附近に、花の窟といふ奇勝があつた。しかし私はそれを知らない。名所圖繪で見ると、長島から新宮まで、つまり私が汽船で一日航行したその沿海の地には、非常にすぐれた山水が未だに世に知れずに残されてあつて、是非一度は通つて見なければならぬやうな氣がする處が到るところにあるといふことであつた。また漣八町の上流數里のところにも、漣八町以上にすぐれた山水がかくされてあるといふことであつた。

何處に行つても、紀州は海山の勝にすぐれてゐた。

新宮から三輪崎、それから那智山の裾を掠めて、更に西に串本あたりに至る海岸の地方は、概して暖かい、南國の氣分に富んだ、島には黄橘の色彩を點綴し、山には緑色の林を展開した、何方かと言へば、明るい感じのするところであつたが、その海岸から二三里山の中に入つて、小座川の沿岸に、ちよつと特筆しなければならぬ山水があつた。勿論、熊野川のやうな大きなすぐれた山水ではないが、岩石や、山の姿致や、潺々とした溪のさまなどに、一種他と異つた、穏かな靜かなところがあつて、何となく柔らかな心持を旅客に誘つた。例を引いて言つて見れば、耶馬溪に似て、それよりも規模は小さいけれども、あるところに由つては却つて耶馬溪よりもすぐれてゐるやうな溪山であつた。紀州に遊んだものゝ、一度は訪ねて

行つて見るべきところであらうと思ふ。

勝浦は、海の温泉場として、其特色に富んでゐる處であつた。此頃では汽船から上陸して来る浴客が多くなつたと共に、軌道なども出来たために一年毎に次第にその繁華を増して行つた。海の眺めも好く、生魚なども多く、ごたごたはしてゐるけれども、それでも一夜泊つて見ても好いやうなところであつた。

紀州の長い海岸線に沿つて、終日航行する汽船は、勝浦から次第に西して、漸く潮岬近く進んで行つた。この附近は、紀州の海の中でも殊に悪灘の聞えの高いところで、曾てはトルコの軍艦を始め、大きな汽船も度々此の沖に覆没の災厄に逢つたのであつた。凄じくあがる怒濤の中に微かに闇を隈取つて廻轉しつゝ、光る燈臺の光……。

串本の海岸にある橋杭岩の奇も、旅客は注意して見落さないやうに心がけなければならぬ。行つて見れば、噂にきいたほど大きなものでもなかつたけれども、それでも、一つ一つ海中に並んで立つてゐるその岩石のまは、他に多く類を求めることの出来ないものであつた。汽船の甲板から見ると、岩は全く串本の漁市にくつついて了つたやうになつて見えた。

北國の小旅行

一月に行つた北國の雪めぐりは、まだ雪がさう深くなかつたので、十分に目的は達することは出来なかつたけれども、それでも面白い旅だつた。

米原に到着してそこで二時間ほど汽車を待たなければならぬので、二等待合室の中で、「弓子」を一回書いたが、暖爐があり、大きな卓があり、ボカリと體の半は沈むクッションの長椅子があるので、書齋にゐるよりも感じが好かつた。その後、金澤の二等待合室でもやつて見たが、それもわるくなかつた。生中、停車場前の茶屋の一室を借りるよりもぐつと好いなどと思つた。

琵琶湖を傍に、また後にして、雪の山槽の中に入つて行く感じはすぐれて好かつた。浅井長政の亡びた小谷山、秀吉が篝火を一面に焼かせて敵軍の膽を奪つた虎御前山、木の本の町の山裾に位置してゐる傍を通つて、次第に賤ヶ岳の残雪に近寄つて行くあたりは、當年の勝家對秀吉の戦略を思

はせすには置かない。佐久間盛政の壮舉は偉とするに足るけれども、そこから平野に突出して行くだけの兵力を持つてゐなかつたことが残念である。一度押して見たが、その押しが十分にきかなかつたために、今度は却つて敵から押される形になつて、遂に總退却の基をつくつて了つた。あの時、勝家の本軍が盛政の迂回した路を驀地に出て行けば、もつと面白い戦が戦はれたであらうと思ふ。

勝家の軍があつた長い山間の路を一本縦隊——即ち鰻縦隊で出て來たのも餘りすぐれた戦略と言ふことは出來ない。いくら大兵を擁してゐても、あれでは何の役にも立たないのである。曾て文展で、小山榮達氏の描いたその鰻縦隊の畫を見たことがあるが、成ほどあそこらを通ると、あつた繪が

書きたくなるであらうと思はれた。余吳湖の水が半ば雪に埋められて見え
てゐるのも、私に「繪」を思はせた。

敦賀の金崎宮の裏手で、港や、港外にひろがつてゐる海や、黄い赤いベ
ンキ色に塗られた汽船や、成ほど榮螺のやうだと思はれる榮螺ヶ岳や、さ
うしたのを見ていると、大きい方の男の兒は、

「あれは何だらう？ 何の烟だらう？」
かう言つて指した。

成程、見ると、白い黄い烟がもくもくと風に靡いて町の瓦葺の上に長く
長く曳いてゐる。海岸近くから起つて、町を蔽つて、氣比神宮の杜あたり
まで及んでゐる。しかし私は何とも思はなかつた。

「工場の煙だらう。」

唯、かうきめて、暫してから、そこを下りて来た。

と、華表の近所まで来ると、人が五六人慌て、此方に登つて来るのに逢つた。

「火事だよ、父さん。あれは——」

かう男の兒は言つた。

「さうだな。火事だつたんだな、矢張。ぢやもう少し見てゐりや好かつた」
かう私は言ひながら、しかも再び戻つて見る氣にはなれなかつた。それに、一時間の時間の間に、停車場まで行き、好いところがあつたら、午飯を食はなければならなかつた。

町に入つて来ると、いよく火事だといふことが明かになつた。家々か

ら人が皆な出て来た。上さんも出て来れば、娘も出て来た。姉が小さい妹を負つてそゝくさと通りへ出て来たりした。半鐘の響がところどころできこえた。

少し此方に来て、消防の唧筒の置いてあるところでは、火事装束した人達が一生懸命に唧筒を引出さうとしてゐるのを見た。

「これぢや、とても飯などを食はせて呉れさうな家はないな。」

こんなことを言ひながら、私達は旅客の暢氣さを發揮して、騒々しい町の通を靜かに歩いた。

何の家からも、皆な娘や上さんなどが出て見てゐた。平生ではその影をさへ見ることの出来ない深窓の美しい娘さへも……。『お蔭で、敦賀の娘を皆な見せて貰つたやうなもんだな。』こんな戯談を言ひながら、私達は停車

場前に来て、そして漸く遅い午飯に有附いた。

×
今庄あたりは雪が深かつた。

福井の一つ手前の驛を通るあたりで、私は北に連なる深雪の壁の細かいさう大して高くない山巒を「あの山の中だよ。朝倉義景の城のあつたところば——」

かう男の兒達に指し示した。

×
蘆原で一夜泊つた。

好い温泉場だ。山中、山代、栗津、それよりも此方の方が好くはないかしらと思はれる位だつた。雪の北國であるにも拘らず、まだ地上には雪がな

く、おほろけな月が温泉宿の並んだ狭い通に深くさし込んで、ところどころに三味線の爪弾の音のするなど、何だか春の夜のやうな氣がした。汽車の中で教つたK亭といふ一番町の外れにある旅舎をさがしさがし歩いて行つて泊つた感じもわるくなかつた。

この温泉は明治十七年に初めて發見されたのだといふ。その以前は、此處はこゝら附近に見る瀉湖の多い卑濕地で、唯、一面に蘆荻が繁つてゐたといふ。つまり越後の村上の近くの瀬波温泉とその地形は違つてゐてもその發達を同うしてゐるのであつた。温泉の發見されたために忽ちかうした小繁華を呈したのであつた。

温泉にも古い老衰したものもあれば、新しく發見されて段々榮えて行くものもある。此處にも盛衰のリズムが微かに波打ちつゝあるのである。

三國の港外にある東尋坊は、ちよつと奇觀だ。岩石としては目を刮せしむるに足るものがある。唯、惜しいことには、附近がやゝ淺露で、陸上からもわけなく行つて見ることが出来ることである。これが海上を舟でわたつて行かなければ行けないやうなところにあるのだと一層名勝が名勝としての價値を大きくしたであらうと思ふ。例へば男鹿半島の高雀窟のやうに、または若狭の大門口のやうに。

東尋坊に行く途中で、日和下駄の齒を二枚折つて了つたので歩き悪くつて爲方がない。三國に行つたら是非入れなければなど、思ひながら私は歩いた。

三國は衰へた港として面白い。丁度、下田、酒田、三崎など、その運命を一にした古い和船の港であつた。大きな古い倉庫、さびしい暗い人通りの稀な通、その間を、例の赤い蟹を籠に入れた漁師の筒袖の嬖が「蟹は？蟹！」と言つて觸れて通つた。

此處に限らず、北國では、到るところ生魚の多いのが羨しかつた。敦賀などでも、蟹やかれひが澤山にあつた。小鯛の赤い奴が一杯籠に入れられてあるのなどは、あたりの雪に反映して、さながら繪のやうに私には思はれた。到るところの家の軒に、むしかれひが串に通して干してあるのなども、私に酒を思はせた。

初めに訊いた下駄の齒入屋は、生憎主人が留守だつたが、次に發見した下駄屋の亭主は丁度仕事場で仕事をしてゐたので、すぐ承知して入れて呉

れた。

待つてゐる間、

『此處等に、午飯を旨く食はせて呉れる家はないかね？』

かう訊くと、

『いくらもあります。』

私は昨日敦賀の停車場前で懲りてゐるので、藝者などの入る料理でない、また純然たる旅舎でもない、唯單に旨い午飯を食はせて呉れるやうな家をもとめてゐることを話すと、『それなら、そこが好い。この向ふ側で、Mといふ魚屋で、ちよつと飯を食はせて呉れる家がある。あそこなら、好い』かう下駄屋の亭主は教へて呉れた。それに私は、何うかして蟹を少し土産に持つて行きたいと思つてゐる。『それなら、そこが一番好い』と亭主は言

つた。

下駄が出来たので、そこを出て、五六軒行くと、果してそこに亭主の教へてくれたMといふ魚屋があつた。『此處だ！』かう言つて入つたは入つたが、何だか具合がわるい。それも料理屋らしいところが少しもないからであらうが、兎に角、午飯を食はせて貰ひたいことを話すと、今まで一人の客と長火鉢で相對して話してゐた、お袋らしい老王婦は立つて来て、『これから飯は炊くんだが、それでも好ければ』といふ。汽車の時間はまだあるので、待つことにして、そして私達は上り込んだ。老王婦は別に室に案内するでなしに、直ちにその隣の火燵のあるところへと私達を請じた。

そこで過した一二時間は愉快であつた。旅で一番うれしいのは、隔てない取扱を受けることである。旅客として、なしに、單に人として取扱はれ

ることである。二をりくべてたけるほたけのあたゝかきこの情けをばわけ忘れめや」かうした歌を、まだ若い頃、日光の山奥で詠よんだが、さうした他人ならぬ情が旅客には何とも言はれずうれしいのである。私はそこで老主婦と、やがて歸つて来たその娘らしい主婦と一時間ほどゐたが、その他人ならぬ暖かい親切な取扱を何時の日か忘れ得よう。私は其處で、土産に持つて行く蟹を買ひ、子持蟹こもちかにの食ひ方を教はり、烏賊いかの生いつくりで、好い心持に酒を飲んだ。私は一時間の中に、此間も東京から手紙をやつて蟹を送つて貰ふほどそれほどこの主婦達と懇意こんいになつた。それから比べたら、敦賀の停車場前の取扱は、女達は、主人の素つ氣ない風は………。

「好い感じがする上さんだつたね。」

そこを出て来て、私達はこんなことを言つた。

「北中の上さんのやうだね。」

かう男の兒も言つた。北中とは、越後と羽前の間に横つた蒲萄峠ぶどうたけの一驛であるが、その旅舎の上さんも親切であつたことを男の兒は思ひ出したのであつた。

×

金津かなつから動橋いよりはしあたりまで来る間で、私は立派な美しい白山はくさんの姿を仰ぐことが出来た。

冬なればこそ、そのやうに晴れやかに手に取るやうに見ることが出来たのであらう。平野の向うには霰あられの多い雪の山巒が屏風のやうに聳そえて、それがすつと眞白な高い白山につゞいてゐるさまが何とも言はれず見事であつた。

「白山だよ。」

かう私は男の兒達に指し示した。

大きい方の男の兒は、ポケットから手帳を出して、そしてそのスケッチをやり始めた。日は美しく山の雪にかやきわたつた。

「どれ、見せ！」

出来上つたのを私は手に取つて見たりした。

私は何うかしてこれを歌にしようと思つて長い間考へた。汽車が柴山瀧の三湖臺附近を通る頃、私は「むら山のしけきがなかにあらはれてさやし雪の越の白嶺は」と手帳に書きつけた。

旅の歌より

用水に添つた路が長くうねうねとついでる。岸には浚竹の藪ががさがさ朝風にざわついてゐる。いかにも平野の冬の氣分である。

用水にそひゆく朝の路寒しかしここにこゝに梅は咲けども

かうした歌が出来た。始め二三の句を「そひ行く路の風寒し」とやつた。そして長い間考へて歩いた。何うも満足でない。朝といふ字を入れたい。風も強く寒く吹いてゐるのだから、風といふ字も入れたい。また一里ほど歩いた『朝の路寒し』それで好いと思つた。わざわざ風といふ字を入れな